

第12回学習意識調査の報告について

本調査は、藤沢市教育文化センターにおいて、1965年(昭和40年)以降、5年毎に繰り返し、ほぼ同一内容の質問を用いて市内の中学校3年生を対象に実施されているものです。今回の調査は新型コロナウイルス感染拡大の影響でやむを得ず実施を1年伸ばすこととなりましたが、これまでの変化を長期的な視野で把握するとともに、新設項目を加えることで見えてきた新たな課題も含め、分析した結果を報告するものです。

1. 調査のねらい

その時々における生徒の学習意識だけでなく、時代の趨勢を読み取り、これからの教育の方向を見定める上での重要な基礎資料を得るとともに、その成果を学校教育の計画・立案のための基礎資料として学校現場や教育関係機関等に広く提示していく。

2. 調査対象

藤沢市立中学校3年生全員(全19校、3461名)

3. 調査の実施期間

2021年(令和3年)5月10日(月)～6月18日(金)

4. 調査項目

- ・「帰宅後の学習時間」「学習の理解度」「学習への自信」等、継続調査項目及び「相談相手の実態」等、前回までの追加調査項目(13項目)
- ・「SNSの利用」「性別による回答傾向の背景」等、新設項目(2項目)

5. 特徴的な結果について

- ① 「学習の理解度」「学習への自信」「学習の意欲」などに継続調査項目において、「望ましい選択肢」を選ぶ生徒が増加している。
- ② 「勉強に関する悩み事」等の相談相手として、父、母を選ぶ生徒が増加している。
- ③ 「学校の中で一番大切に思うもの」は、「友だちづきあい」を選ぶ生徒が最も多く前回から増加に転じているが、「勉強」を選ぶ生徒も微増している。
- ④ 期待する授業として「自分達で課題を見つけ、考えたり調べたりする授業」「将来に役立つ知識や技術を身に付ける授業」を選ぶ生徒が増加してきている。
- ⑤ 「学習の意欲」を測る項目のうち、「責任感」に関わる回答が増加している。
- ⑥ SNSを利用する時間が長い生徒ほど、学校で一番大切に思うものに「勉強」を選んだ生徒は減少する。

6. 今後の予定

- 4月下旬 調査報告書を藤沢市立小・中・特別支援学校55校へ配布
- 5月 教育委員会定例会で報告、市議会議員へ資料提供
- 5月下旬 調査報告書を県内外の教育研究所、教育委員会関係諸機関へ配布
- 8月下旬 教育文化講演会において、調査テーマを元にシンポジウム開催
市内教職員へ周知のため、「ふじさわ教育」(教育文化センター)で分析等を掲載予定

教育委員会 5月
定例会 資料

2021年（令和3年）実施

第12回「学習意識調査」報告書 抜粋

藤沢市教育文化センター

目次

はじめに

第1章 調査の概要 1

1. 調査の主旨 …… 2
2. 調査項目について …… 2
3. 予備調査について …… 2
4. 調査の対象 …… 5
5. 調査の方法 …… 5
6. 調査の実施期間 …… 5
7. 集計の方法 …… 5

第2章 56年間の時系列比較 7

1. 帰宅後の勉強時間 …… 8
2. 学校の勉強の理解度 …… 9
3. 学校の勉強についていく自信 …… 10
4. 勉強の意欲 …… 11
5. 勉強への集中度 …… 12
6. 勉強以外の自由時間に対する願望 …… 13
7. 学校以外での習い事 …… 14

第3章 2021年度 中3生徒の学習意識 15

1. 帰宅後の勉強時間 …… 16
2. 学校の勉強の理解度 …… 21
3. 学校の勉強についていく自信 …… 23
4. 勉強の意欲 …… 24
5. 勉強への集中度 …… 28
6. 勉強以外の自由時間に対する願望 …… 29
7. 勉強に関する悩み事の相談相手 …… 30
8. 勉強以外の悩み事の相談相手 …… 33
9. 学校の中で一番大切に思うもの …… 36
10. 学校以外での習い事 …… 39
11. 期待する授業 …… 42
12. 学習意欲 …… 51
13. 勉強という言葉から
思い浮かべるイメージ …… 58

第4章 新設項目 63

- 項目1
1. 「SNS の利用時間」と「用途」 …… 64
 2. 「SNS の利用」とのクロス集計 …… 68
- 項目2
1. 「内省志向」と「謙遜」 …… 77
 2. 「内省志向」「謙遜」と勉強との関連 …… 78

第5章 調査全体のまとめ 83

1. 56年間の学習意識の変化 …… 84
2. 帰宅後の勉強時間の増加と二極化 …… 85
3. 相談相手として「家族」の増加 …… 86
4. 勉強の意欲の背景 …… 86
5. 友達づきあいの「友達」とは …… 87
6. SNSの利用状況について …… 88
7. 授業への高い期待 …… 88
8. 自主的に学習に取り組む生徒の増加 …… 89
9. 男子と女子 …… 89
10. 今後の調査についての課題 …… 90

資料 91

1. 質問紙 …… 92
2. 2021年学習意識調査結果一覧 …… 100
3. 56年間の主な出来事 …… 110
4. 教育課題調査研究部会の取り組み …… 114

おわりに

1. 調査の主旨

当センターでは、1965（昭和40）年以降、5年毎に繰り返し、ほぼ同一内容の質問紙を用いて市内の中学校3年生の学習意識を調査してきた。長期間にわたって継続してきたねらいは、その時々における生徒の学習意識だけでなく、時代の趨勢を読み取り、これからの教育の方向を見定める上での重要な基礎資料を得るとともに、その成果を学校の教育計画立案推進のための基礎的資料として広く提示していくことにある。

2020（令和2）年実施予定の「第12回学習意識調査」は、調査開始から数えて55年目にあたる。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、やむを得ず調査の実施を1年先に延ばすこととなったが、今回の調査では、生徒の学習意識がこの56年間でどのように変化してきたのかを長期的な視野に立って把握するとともに、新設項目を付け加えることで、前回、2015（平成27）年実施の「第11回学習意識調査」で課題となった、SNSの普及が生徒の学習意識にもたらす影響や、性別による回答傾向の違いについても示唆を得たいと考えた。

2. 調査項目について

調査項目については、2019（令和元）年度1年間をかけて検討を行い、表「調査の基本構成」に示したように、時系列比較という観点から、原則として中学校3年生を対象に過去一貫して使用してきた「継続調査項目」を踏襲することにした。

ただし、「継続調査項目」や前回までの「追加項目」の中には、質問や選択肢の構成の仕方の一部に中学校3年生の現状にそぐわないものや生徒の意識を捕捉するのに必ずしも適切ではなくなっているものもある。そこで、今回の調査にあたっては、一部の項目で質問や選択肢の構成を修正した。また、これまで質問紙の冒頭で尋ねてきた性別については、性の多様性に配慮し、選択肢に「その他」を加えることにした。なお、前回の調査で使用した「新設項目」（学習方略）については、調査結果より学習意欲との関連など一定の成果が得られたが、5年間での変化はそれほどないと考えられるため、今回の調査では使用しないことにした。

一方、今回「新設項目」として加えたのは、「SNSの利用」と「性別による回答傾向の背景」を調べるための2項目である。

前回の「第11回学習意識調査」では、「学校の中で一番

大切に思うもの」について「勉強」と答えた生徒が大幅に増え、それに呼応するように「友達づきあい」と答えた生徒が大幅に減少した。その要因の一つとして示唆されたのが、SNSの急速な普及にともない、友達と学校の外でもオンラインで常につながっている可能性である。こうしたSNSの影響は、「勉強の集中度」に関しても考えられることであり、今後注目していく必要があると、報告書²⁾には述べられている。そこで、今回の調査では「新設項目」として、「SNSの利用時間」と「用途」を尋ねる項目を新たに付け加えることで、生徒のSNSの利用状況と学習意識との関連についても調べることにした。

また、これまでの調査では、結果を性別で見えていくと、「学校の勉強の理解度」「学校の勉強についていく自信」などの項目で、男子は女子よりも「理解している」「自信がある」と回答する割合が高いという結果が繰り返し得られている。こうした性別による回答傾向の違いがなぜ生じているかについては、女子のほうが、謙遜して低めに回答していることや、日頃から自分を振り返る内省志向が高いことなどの可能性が考えられた。そこで、今回の調査では、性別による回答傾向の背景を探るために「謙遜」と「内省志向」について尋ねる項目も新たに付け加えることにした。

3. 予備調査について

本調査実施にあたっては、先に触れたように、2019（令和元）年度1年間の検討を行う中で、以下に示す2回の予備調査を実施した。

(1) 第1回予備調査

①調査の主旨

「新設項目」を加えるにあたり、「SNSの利用」に関する質問作成の手がかりを得ること、「性別による回答傾向の背景」を調べるために作成した質問の表現にわかりにくいものがないかを確認するため、予備調査を実施することにした。また、今回の予備調査では、中学校3年生の現状に則して修正した質問や選択肢が適切であるかも確かめることにした。

②調査の対象

藤沢市立中学校1年生 2校×2クラス 計4クラス138名（男子67名、女子70名、未記入1名）

③調査の方法

藤沢市教育文化センター作成の予備調査用紙（質問紙法による）を使用。それぞれの学校で担任が調

表「調査の基本構成」

	調査する要因	調査項目の内容	項目番号	備考
継続調査項目	帰宅後の学習実態	帰宅後の勉強時間	(1)	9回調査より改訂：10回調査より質問・回答方法を変更：11回調査より選択肢を一部追加
	学習の理解度	学校の勉強の理解度	(2)	9回調査より3件法から4件法に変更
	学習への自信	学校の勉強についていく自信	(3)	9回調査より3件法から4件法に変更
	学習の意欲	勉強の意欲	(4)	
	学習への集中度	勉強への集中度	(5)	9回調査より3件法から4件法に変更
	自由への願望	勉強以外の自由時間に対する願望	(6)	9回調査より選択肢を一部修正
	学校外活動の実態	学校外活動の種類	(10)	7回調査より改訂：9回調査より選択肢を追加：今回選択肢の一部を修正・追加
前回までの追加項目	相談相手の実態	勉強に関する悩み事の相談相手	(7)	7回調査より改訂：9回調査より選択肢を一部修正
		勉強以外の悩み事の相談相手	(8)	
	学校の意義	学校の中で一番大切に思うもの	(9)	7回調査より追加
	勉強観	授業に期待する事柄	(11)	8回調査より追加：9回調査より回答方法変更、選択肢の一部を修正・追加：10回調査より自由記述を削除：11回調査より現状に合わなくなった質問を一部削除：今回質問の一部を変更
	学習の意欲（理由）	項目(4)の選択肢を選んだ理由	(4)	9回調査より追加：10回調査より自由記述から選択肢に変更
	勉強のイメージ	勉強という言葉から思い浮かべたイメージ	(15)	9回調査より追加：10回調査より項目(4)の補足から独立した項目に変更
	学習の意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・自主的学習態度、達成志向、責任感、従順性、自己評価、自主的学習態度、失敗回避傾向、反学習価値観²⁾ ・内発的意欲³⁾ 	(12)	10回調査より項目(4)の妥当性を確保するために追加：11回調査より他項目との重複を避けるために質問を一部削除：今回質問の一部を修正
今回の新設項目	SNSの利用	SNSの利用時間と用途	(13)	今回よりSNSの普及が学習意識に及ぼす影響を調べるために追加
	性別による回答傾向の背景	<ul style="list-style-type: none"> ・内省志向⁴⁾ ・謙遜⁵⁾ 	(14)	今回より性別による回答傾向の違いが何に起因するのかを調べるために追加

査用紙を配布し、実施、回収した。

④調査の実施日

2019年10月10日（木）～22日（火）

⑤調査の内容（概要）

- a. 帰宅後の勉強時間
- b. 学校外活動の種類：中学校3年生の現状に則して
選択肢3「通信添削」を「通信教育」に変更
- c. 勉強の意欲
- d. 学校の中で一番大切に思うもの
- e. 携帯電話やスマートフォン、パソコン、タブレットなどの利用時間：平日・土曜日・日曜日ごとに
自由記述
- f. 上記の用途：よく使う順に5つ自由記述
- g. 謙遜、内省志向
- h. 授業に期待する事柄：新指導要領を考慮して、質問E「生徒の意見を受け入れてくれる授業」を「グループの人の意見を聞き、話し合うことで、自分の考えを深められる授業」に変更

⑥調査の結果

携帯電話やスマートフォン、パソコン、タブレットなどの利用時間と用途に関する自由記述の内容は多岐にわたったが、「SNSの利用」に関する質問と選択肢を作成する上で十分な手がかりが得られた。

また、「謙遜」と「内省志向」を尋ねた質問の結果からは、女子が控え目に回答する傾向が見られるなど、「性別による回答傾向の背景」を探る質問として適切であることが確かめられた。さらに、現状に則して修正した質問や選択肢については、特に問題なく生徒が回答できていたことから、本調査で使用することとした。

一方、「学校外活動の種類」の選択肢「その他」の自由記述には、3件と数は少ないものの「英語・英会話」という回答が見られたことから、選択肢の「学習塾」に英会話が含まれている可能性や、新指導要領の影響、高校・大学入試との関連など、英会話への関心が高まっていることが議論となり、選択肢に「英会話」を加えることとした。

(2) 第2回予備調査

①調査の主旨

第1回予備調査の結果を踏まえて作成した「SNSの利用」についての新設項目と、「学校外活動の種類」の選択肢に「英会話」を加え、一部質問で追加修正を行った本調査用紙の原案を作成。答えにくい質問

の有無や性別の回答の仕方等を確認するために2回目の予備調査を行った。

②調査の対象

藤沢市立中学校1年生 2校×2クラス 計4クラス126名（男子70名、女子52名、その他1名、回答しない3名）

③調査の方法

藤沢市教育文化センター作成の予備調査用紙（質問紙法による）を使用。それぞれの学校で担任が調査用紙を配布し、実施、回収した。

④調査の実施日

2020年1月14日（火）～22日（水）

⑤調査の内容

おおむね本調査用紙に準じる。なお、追加修正は、これまでの「学習の意欲」を尋ねる質問Dの「しめきりまでに、宿題をすませる」で、中学校3年生の現状にそぐわないことから「宿題」を「課題」に変更した1か所。また、性別を「男子・女子・その他」の3択で尋ねる調査用紙と、「回答しない」を加えた4択で尋ねる調査用紙の2つを用意した。

⑥調査の結果

新設項目や選択肢・質問の一部を変更したことについては、特に問題なく回答できることを確かめることができた。性別については、「回答しない」を加えた4択では、わずかではあるが不適切な回答を誘導することがわかったため、「男子・女子・その他」の3択で尋ねる調査用紙を採用することとした。

(3) 2回の予備調査を踏まえて

本調査に向けては、調査の実施が1年先に延びたことから、2020（令和2）年度に、予備調査結果と調査用紙を再度吟味し、「新設項目」内の質問の順序（「A. 謙遜、B. 内省志向」→「A. 内省志向、B. 謙遜」）や語順（「携帯電話やスマートフォン」→「スマートフォンや携帯電話」）を入れかえるなど微調整を行い、調査の万全を期した。

なお、授業に期待する事柄を尋ねる質問E「グループの人の意見を聞き、話し合うことで、自分の考えを深められる授業」については、「自分の考えを深められる」というポジティブな内容が含まれていることから、他の質問に比べ、生徒の回答を期待する方向へ誘導してしまう可能性が危惧されたため、本調査では「グループで考えたり話し合ったりする授業」に改めることにした。

4. 調査の対象

藤沢市立中学校3年生全員（全19校、3,461名）

5. 調査の方法

- ①調査用紙は藤沢市教育文化センター作成の学習意識調査用紙（質問紙法による）を使用（p.92～99参照）。
- ②全市内中学校に調査の主旨を説明し、各学校に実施を依頼。調査を担当する教員向けには「調査実施の手引き」を作成・配布した。
- ③調査用紙の配布・実施後の回収は、藤沢市教育文化センターの担当者が行った。

6. 調査の実施期間

2021（令和3）年5月10日（月）～6月18日（金）

7. 集計の方法

(1) 集計に用いたデータについて

在籍者3,461名中、調査の結果得られた3,208名分のデータのうち、性別未記入の17名分のデータは除外し、残った3,191名分のデータ（男子1,594名、女子1,539名、その他58名）について集計・分析を行った。なお、時系列比較で用いた各年度のデータは次のとおりである。

1965年	2,424名	（藤沢市立中学校3年生全員）
1970年	2,140名	（ " ）
1975年	2,885名	（ " ）
1980年	4,059名	（ " ）
1985年	5,358名	（ " ）
1990年	855名	（全19校、各校1クラス）
1995年	1,843名	（全19校中9校、各校全クラス）
2000年	3,170名	（藤沢市立中学校3年生全員）
2005年	2,816名	（ " ）
2010年	3,067名	（ " ）
2015年	3,290名	（ " ）
2021年	3,191名	（ " ）

(2) 集計の方法について

①時系列比較

単純集計結果を百分率(%)で表し、1965（昭和40）年以降のデータと比較した。

②追加項目・新設項目の集計

単純集計結果を百分率(%)で表し、性別については前回までの調査結果との比較のため、「その他」を除いて男女別に百分率(%)で表した。前回の調査までの追加項目については過去のデータと比較した。

③クロス集計

単純集計の結果、必要と判断された項目間でクロス集計を行った。

※なお、百分率の数値は小数第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100%にはなっていない。また、集計には無回答項目も含めた。

④グラフの見方

今回、性別の記入について、「男」「女」「その他」とした。その中で、「その他」としたものは58名であった。集計に当たっては、「その他」も他と同じようにグラフ化したが、人数が少ないので、他と同じように見ると誤解が生ずることもあるので、注意いただきたい。

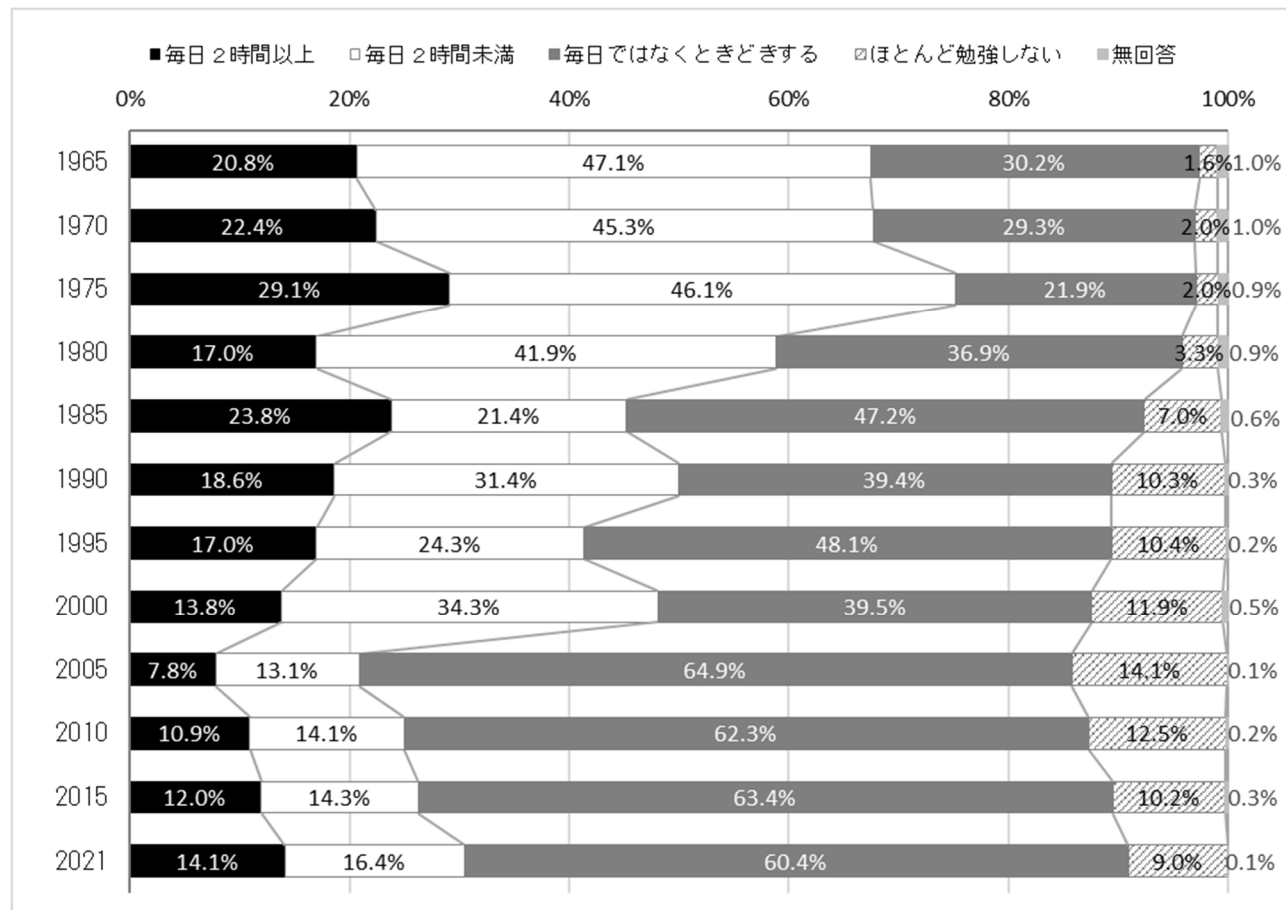
【引用・参考文献】

- 1) 藤沢市教育文化センター（2016）2015年（平成27年）実施 第1回「学習意識調査」報告書 藤沢市立中学校3年生の学習意識 32,42,84.
- 2) 下山剛・林幸範・他（1983）学習意欲の構造に関する研究(2)－学習意欲の類型化の検討 東京学芸大学紀要1部門 34,139-152. による学芸大式学習意欲検査（簡易版）をもとに質問項目を作成.
- 3) 杉村健（1985）小学生の学習心理 教育出版 および杉村健（1987）3章 自発性と学習意欲のとらえ方 伊藤隆二・坂野登（編）講座入門子ども心理学1－子どもの自発性と学習意欲 日本文化科学社 42-65. による学習意欲尺度をもとに質問項目を作成.
- 4) 佐藤有耕・落合良行（1995）大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴 筑波大学心理学研究, 17, 61-66. で作成された内省尺度のうち、「自己を振り返る機会の程度」下位尺度をもとに質問項目を作成.
- 5) Chen, S. X., Bond, M. H., Chan, B., Tang, D., & Buchtel, E. E. (2009) Behavioral Manifestations of Modesty, Journal of Cross-Cultural Psychology, 40, 603-626. で作成された謙遜行動尺度をもとに質問項目を作成.
- 6) 山崎瑞紀（2018）日本版謙遜行動尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 日本社会心理学会第59回大会 発表論文集, S14-05 をもとに質問項目を作成.

5 特徴的な結果① 継続調査項目について

1. 帰宅後の勉強時間

項目1：学校から帰って、一日何時間くらい勉強していますか（学習塾・家庭教師なども含む）



※2000年までは「一日なん時間くらい勉強していますか」と聞いていたが、2005年から、「毎日する」「するときもしないときもある（毎日でなくときどきする）」「ほとんどしない」を選択させ、「するときもしないときもある」と答えた生徒に、「1週間に（ ）日、（ ）時間くらい」と、日数と時間に関する設問に分けた。さらに2010年調査からは、時間について、選択肢（「2時間以上」、「1～2時間」、「1時間未満」）で尋ねている。

比較結果：

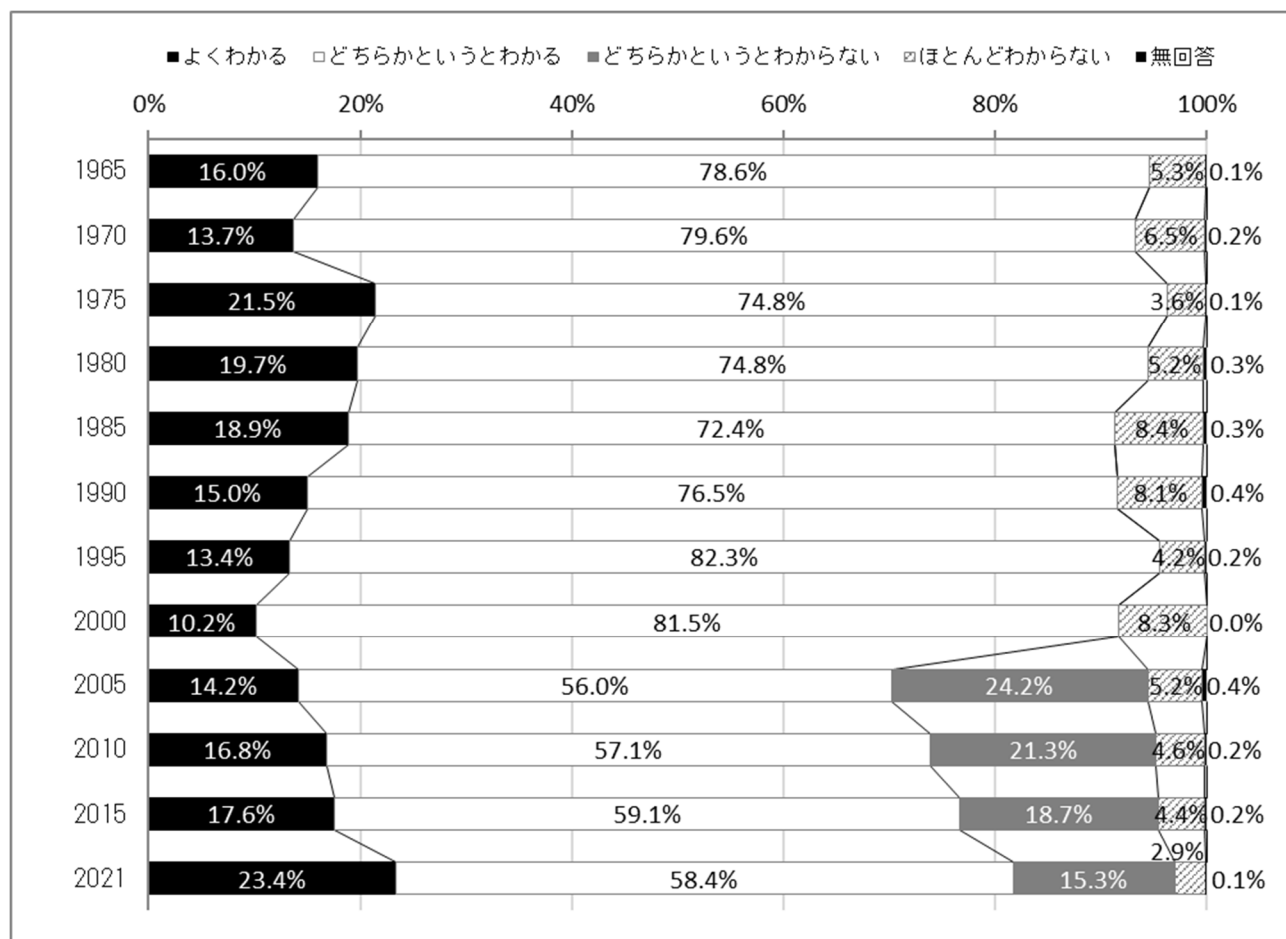
- ① 「平日、学校から帰ってどのくらい勉強するか」について、「毎日2時間以上」と答えた生徒の割合が過去最低を記録した2005年の7.8%から回復し2021年は14.1%となった。「ほとんど勉強しない」の割合が9.0%となり、1990年代の水準にまで戻ってきている。
- ② 「毎日勉強する（毎日2時間以上＋毎日2時間未満）」と答えた生徒の割合をみると、1965年から増加し、1975年には75.2%（29.1%＋46.1%）でピークを迎えるが、その後、減少傾向に転じ、2005年には、20.9%（7.8%＋13.1%）と最低になる。その後増加し、今回30.5%（14.1%＋16.4%）とほぼ3人にひとりになった。

考察：

「帰宅後の勉強時間」は、子どもたちのライフスタイルを表している。「毎日勉強する」習慣を持っている生徒は、1975年には4分の3だったが、2005年まで5人にひとりまで減少し、その後増加傾向を示している。学習塾に通う生徒は、1980年の調査で5割を超え、1990年には7割に達する（p.14）。帰宅後の勉強は「自身で復習や予習をするもの」から「勉強は塾でするもの」へ変わり、ゆとり教育の中で家庭学習（宿題）も減少していったことやテレビゲームに夢中になるなど学校の勉強以外のことに関心をもつ生徒が登場したことで、「勉強時間そのものが減っていったこと」の理由として推測される。

2. 学校の勉強の理解度

項目2：学校での勉強がよくわかりますか？ どれか一つに○をつけてください。



※2000年までは、よくわかる、わかるときもわからないときもある、ほとんどわからない の3件法、2005年から4件法 である。

比較結果：

- ① 勉強が「よくわかる」と答えた生徒の割合が、1975年の21.5%から減少傾向にあったが、過去最低であった2000年の10.2%から5年ごとに増加し、2021年には前回に比べ5.8ポイント増加し23.4%となった。
- ② 2005年の調査から取り入れられた「どちらかというわかる」の割合は56.0%から増加し、2021年は58.4%となり、「わかる（よくわかる＋どちらかというわかる）」は8割(23.4%＋58.4%)を超える。
- ③ 「どちらかというわからない」と答えた生徒の割合は、2005年の24.2%から減少し、2021年は15.3%となった。
- ④ 「ほとんどわからない」と答えた生徒の割合は、2000年の8.3%から減少傾向を示し、今回、過去最低の2.9%となった。

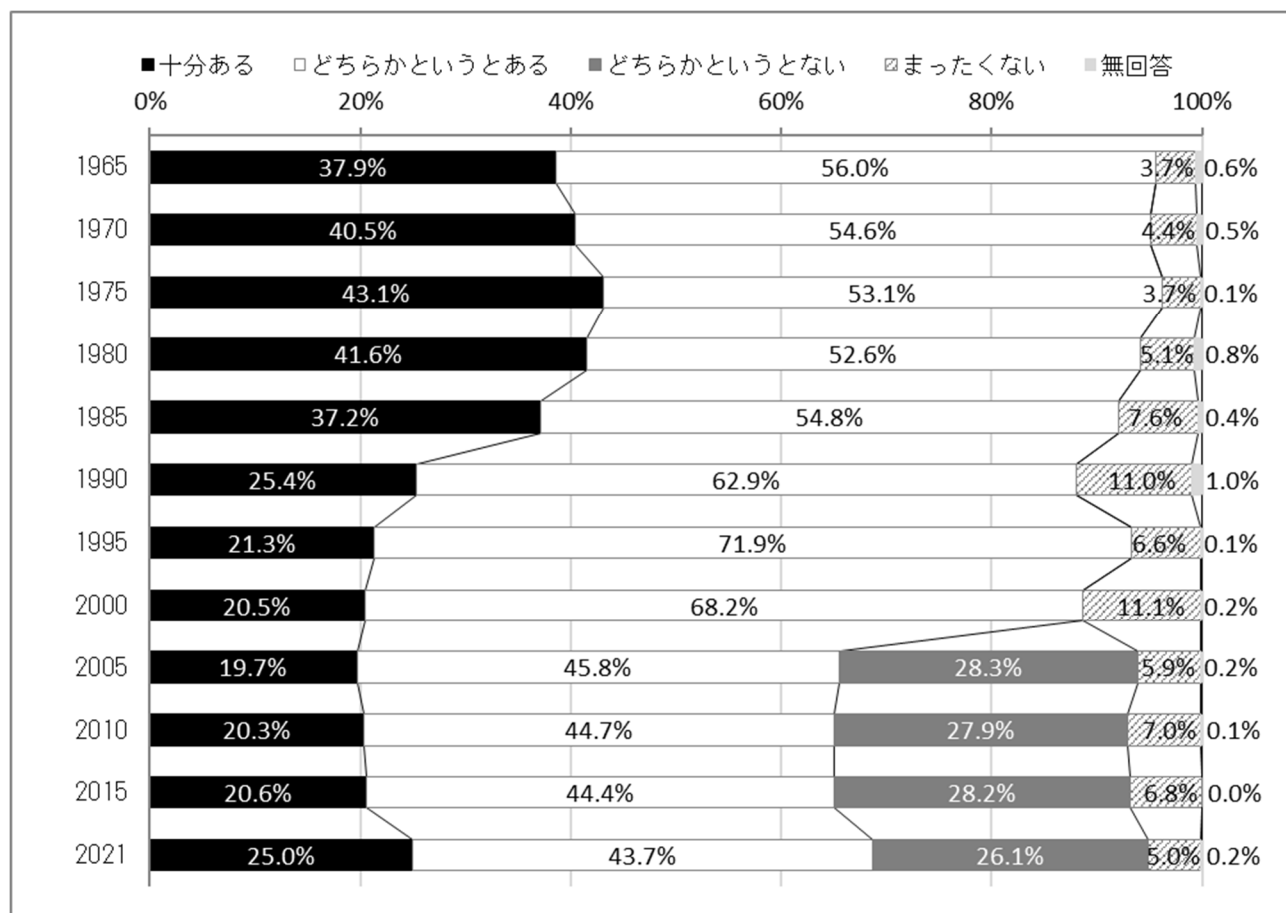
考察：

「勉強がよくわかる」と答えた生徒は、1975年にピークをむかえ、減少傾向を示す。2000年には過去最低の10.2%を示したが、それ以降、増加傾向を示し、今回23.4%と、1975年を超え、過去最高を示している。また「ほとんどわからない」と答えた生徒の割合も約3%とこれまででもっとも低い数値となっている。

2021年の学習指導要領の改訂実施にむけて、生徒の興味・関心や主体的な学びを大切にした授業づくりが行われ、また市教委による個別の学習支援事業や各学校での放課後・夏季休業中の勉強会実施などさまざまな取り組みが行われていることも、生徒の「勉強への理解」につながっているのかもしれない。

3. 学校の勉強についていく自信

項目3：学校の勉強についていく自信がありますか？ どれか一つに○をつけてください。



*2000年までは、選択肢は、十分ある、あるとも、ないとも、いえない、まったくくない の3件法である。

比較結果：

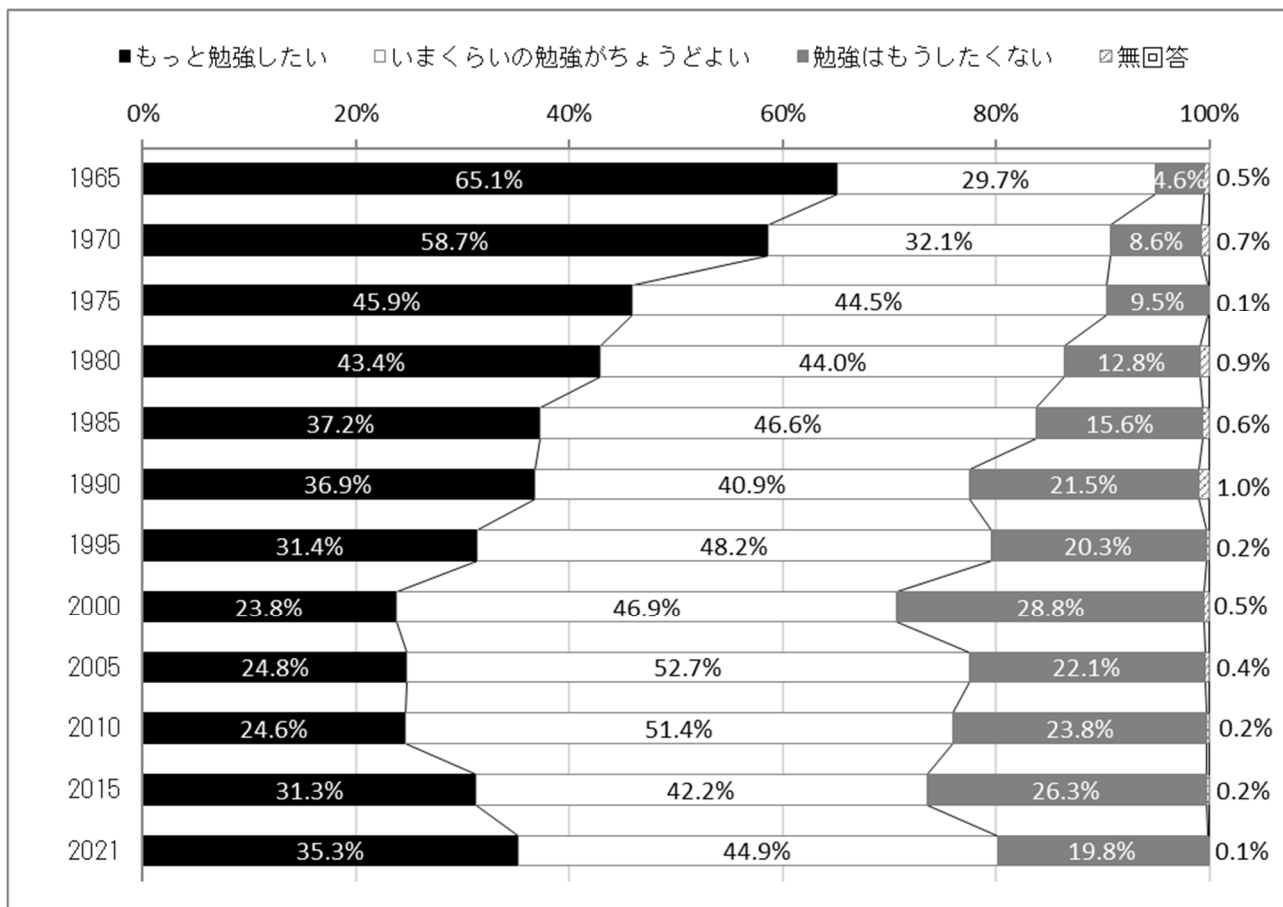
- ① 全体的な傾向を見ると、1975年の43.1%の生徒が「(自信が)十分ある」と答えたのをピークに減少してきた。その後1995年から2015年まで、ほぼ20%前後で変わらなかったが、今回、25%に増加し、1990年とほぼ同じ割合を示した。
- ② 今回、前回と比べて、「自信がある(十分ある+どちらかというところ)」が、65.0%から68.7%(25.0%+43.7%)と3.7ポイント増加し、わずかだが増加した。
- ③ 「自信がない(「どちらかというところない」+「まったくくない」)」は、2005年からほぼ横ばいだったが、今回35.0%→31.1%と約4ポイント減少した。

考察：

自信が「十分ある」と答えた生徒の割合は、今回4.4%増加した。次回の調査結果をみないと、増加に転じたかといっていいのか不明だが、「まったくくない」もわずかだが減少しており、自信をとりもどしつつあるようにもみえる。さまざまな教育改革の取り組みの中で、「自信」と関係するものとして、1980年代からの「高校入試改革」と2004年に始まった「観点別評価の導入」を考えた。特色ある学校の設置、少子化による競争倍率の低下もあり、選択肢は多様化している。また相対評価から観点別評価へと、生徒に手渡す「評定」もその意味が大きく変わってきた。それらが生徒の「自信」にかかわっている可能性もある。

4. 勉強の意欲

項目4：もっと、たくさん勉強したいと思いますか？ どれか一つに○をつけてください。



比較結果：

- ① 「もっと勉強したい」と答えた生徒の割合は、1965年 65.1%だったが、その後、過去最低を示した2000年(23.8%)にかけて急激に減少する。その後、2010年までほぼ横ばいで推移していたが、その後、増加傾向を示し、今回4.0ポイント増加した(31.3%→35.3%)。
- ② 「勉強はもうしたくない」と答えた生徒は、1965年(4.6%)から2000年(28.8%)まで増加し、その後20%を超える水準で推移したが、今回19.8%と6.5ポイント減少し、35年ぶりに20%以下になった。
- ③ 「いまくらいの勉強がちょうどよい」と答えた生徒は前回2015年よりも2.7ポイント(42.2%→44.9%)とわずかだが増加している。

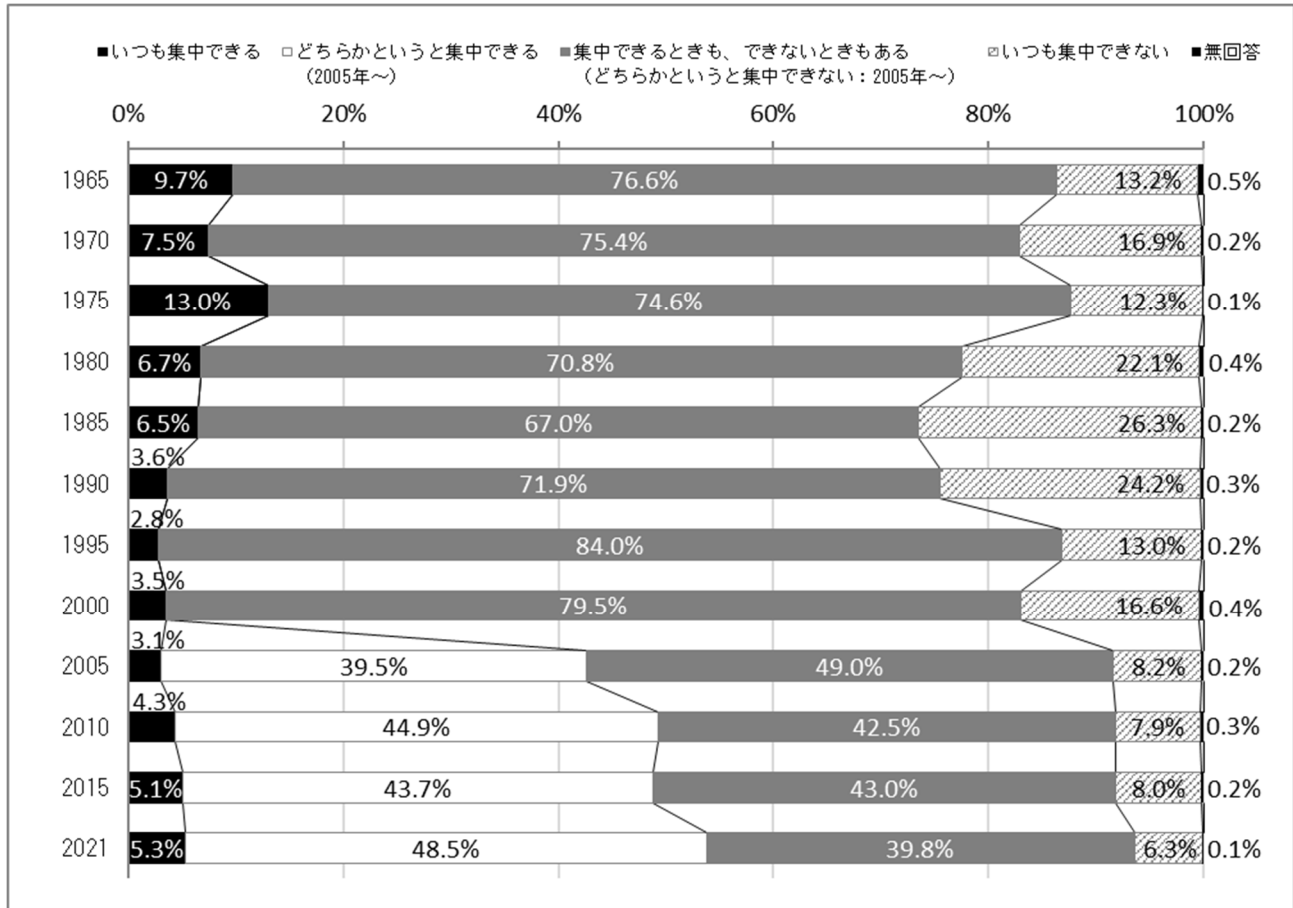
考察：

1965年の調査開始以降減少し続けていた「もっと勉強

したい」と答えた生徒の割合が、2010年より増加傾向に転じた。この項目の結果は、1990年代後半、校内暴力、落ちこぼれ、不登校などの社会背景の中で、大きな関心を集めてきた。今回、前回に続いて、「もっと勉強したい」が増加し、「もう勉強したくない」が減少したことは、教育関係者にとって喜ばしいことかもしれない。その要因として考えられることとして、コロナ禍で、学校の休校、マスク着用、グループでの話し合い禁止など制限された「学校の勉強」を経験したことで、勉強について、改めてその意味を考える機会になったことが考えられる。また新学習指導要領で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善をすすめることが明記され取り組まれていることもあげられる。生徒自身の「勉強したい」という思いこそが、その原動力である。勉強へと向かう意欲が生徒の内から生まれるような授業を教師は考え続けたい。

5. 勉強への集中度

項目5：勉強になかなか集中できないことがありますか？ どれか一つに○をつけてください。



※2000年までは、選択肢は「いつも集中できる」「集中できるときもできないときもある」「いつも集中できない」の3択であった。

比較結果：

- 勉強に「いつも集中できる」と答えた生徒の割合は、1975年の13.0%以降、10%未満と少ない傾向が続いてきた。今回、前回とほぼ同じ傾向を示しているが、1995年から、回を重ねるごとに、ほんのわずかだが、増加している。
- 今回、勉強に「いつも集中できる」と答えた生徒の割合は5.3%と前回とほぼ変わらないが、「どちらかという集中できる」は4.8ポイント増加(43.7%→48.5%)した。また「いつも集中できない」は、1.7ポイント(8.0%→6.3%)とほんのわずかだが減少し、1965年以降、最低の割合を示した。
- 「いつも集中できない」を選んだ生徒の割合は、1980年から1990年の間、4人にひとりだった。

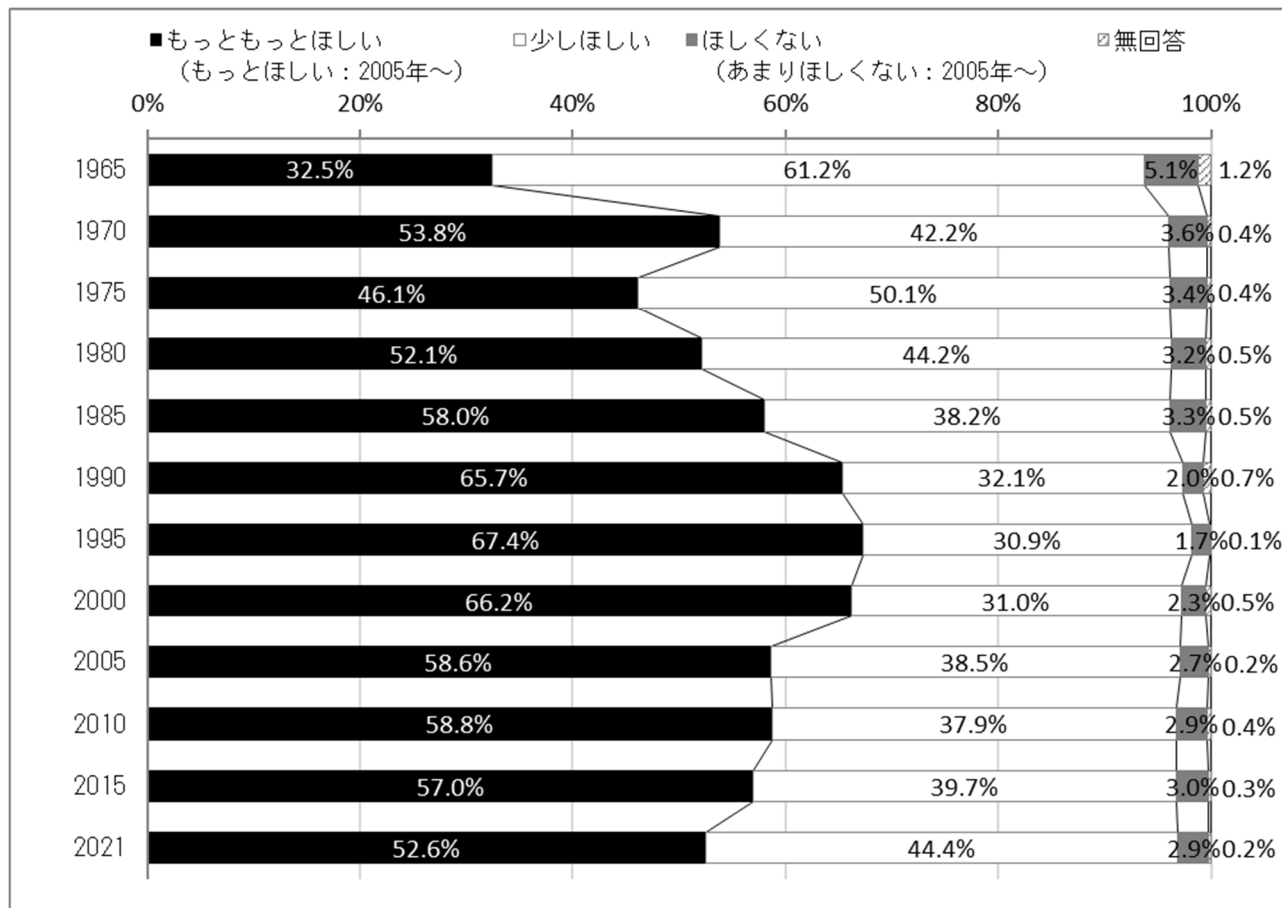
考察：

「いつも集中できる」と答えた生徒の割合は、1975年の13.0%をのぞくと、1965年より1割を超えないで推移してきた。また「いつも集中できない」と答えた生徒の割合が、1980-1990年にかけてほぼ24%と多い。ちょうど、校内暴力、不登校などが注目された時期でもあり、集中できない環境であったとも考えられる。

今回、「集中できる(いつも集中できる+どちらかという集中できる)」が2005年以降はじめて半数を超えた(53.8%)が、掲示物の工夫などユニバーサルデザインを意識した校内での学習環境づくりが進んでいることがその要因として考えられる。またコロナ禍で、小さな声で話すなど授業の進め方も変わり、教室が「静かに」なっていることも影響しているのかもしれない。

6. 勉強以外の自由時間に対する願望

項目6：勉強以外の自由時間がほしいと思いますか？ どれか一つに○をつけてください。



※2000年まで、選択肢は「もっとほしい、少しほしい、ほしくない」で、2005年からは、「もっとほしい、少しほしい、あまりほしくない」の3件法である。

比較結果：

- ① 勉強以外の自由時間が「ほしい(もっとほしい+少しほしい)」と答えた生徒の割合は、50年間常に高く、9割を超えている。1990年から2000年まで、「もっとほしい」と答えた生徒の割合が65%を超える時期があったが、2005年から今回にかけては58~52%程度にゆるやかに減少している。
- ② 勉強以外の自由時間を「ほしくない」と答えた生徒の割合は、今回もわずか(2.9%)である。
- ③ 勉強以外の自由時間が「もっとほしい」と答えた生徒の割合と、「少しほしい」と答えた生徒の割合を比べると、1965年1:2だったが、その後1990年には2:1になり、また「少しほしい」と答えた生徒の割合が増え、5:4になっている。

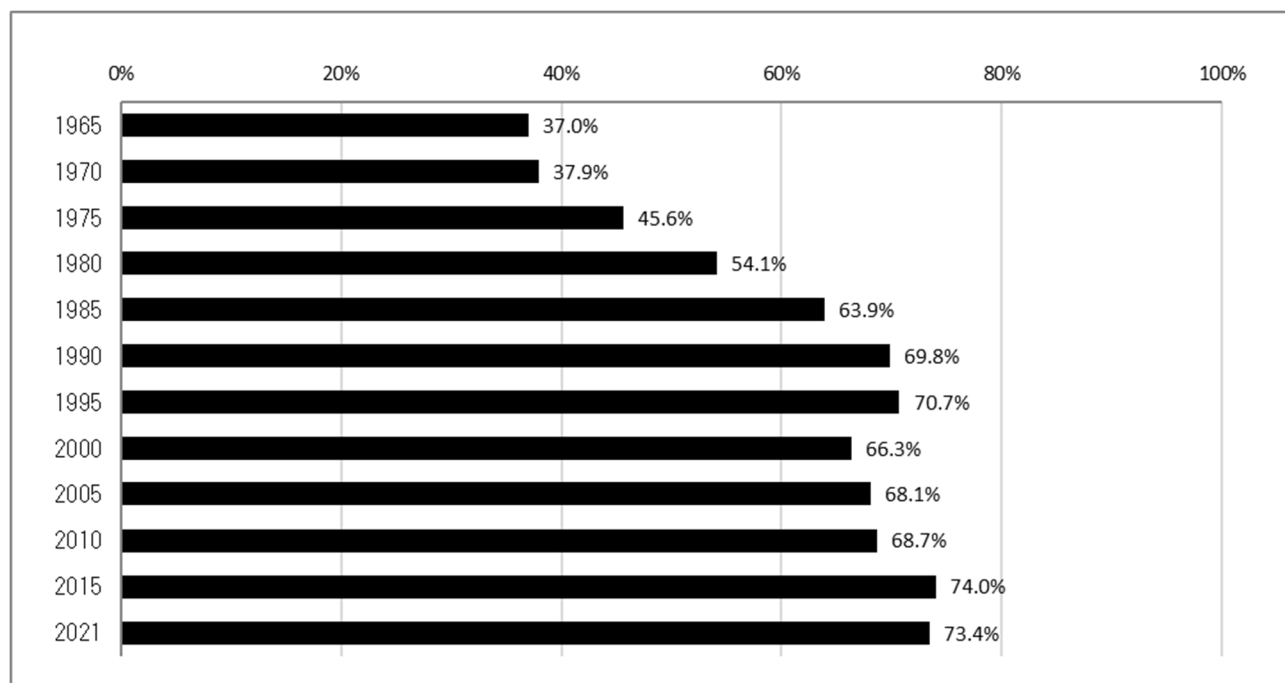
考察：

自由への願望は、生徒が学校生活や家庭生活で窮屈さを感じていることの現れともとらえることができる。「もっとほしい」という強い願望は、1965年32.5%だったが、1995年67.4%をピークに減少している。

1975年から1995年の「もっとほしい」と答えた生徒の増加は顕著で、学校の息苦しさを示しているのかもしれない。1980年代の校内暴力、不登校などさまざまな問題がその要因となっていたとも考えられる。今回、前回に比べて「もっとほしい」と答えた生徒の割合が4.4ポイント(57.0%→52.6%)と減少した一方で、「少しほしい」と答えた生徒が4.7ポイント(39.7%→44.4%)増えた。コロナ禍で部活動や学習面の時間が減り、自由に過ごせる時間が多かったのかもしれない。

7. 学校以外での習い事(学習塾のみを比較)

項目10：学校以外で、習っているものに、○をつけてください。



比較結果：

- ① 「学習塾」に通っている生徒の割合は、前回に比べてほぼ変わらず、4人に3人の割合(73.4%)である。
- ② 「学習塾」に通う生徒は、1965年にはほぼ4割(37.0%)だったが、1970年代、80年代と大幅に伸び、1995年には、70.7%になる。その後、2000年に一度減少するが、わずかに増加傾向を示し、前回の2015年には74.0%と過去最高を記録した。
- ③ 今回は、前回に比べ、ほぼ同じ(74.0%→73.4%)だった。

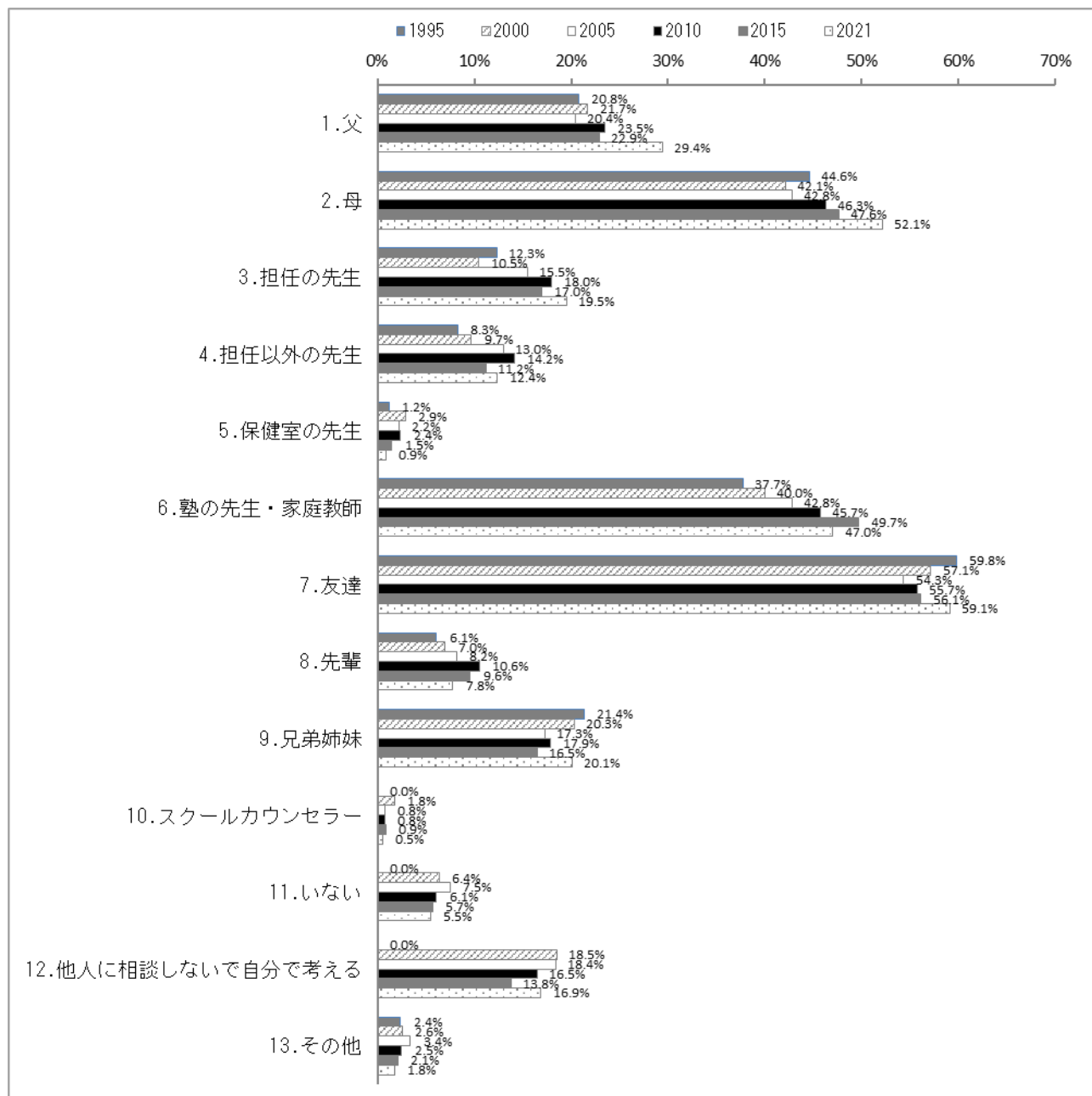
考察：

「学習塾」に通う生徒は、1965年以降、1995年まで、急速に増加し、その後2010年まで60%台後半を推移してきた。今回、「学習塾」が、前回とほぼ同じ割合で高止まりした。そのことについて、コロナ禍で、塾を開くことができなかつたり、保護者の収入の減少等で学習塾をやめる生徒がでて、「学習塾」に通う生徒の割合が減るのではないかと考えていたが、その影響は少なかったと推測される。

「学校以外での習い事」として、「スポーツ関係」に通う生徒が増加している(p.42)。「学習塾」と複数の機関に通う生徒も想定され、今後の調査結果に注目したい。

5 特徴的な結果② 7. 勉強に関する悩み事の相談相手より

(2) 1995年からの時系列比較及び考察



比較結果：

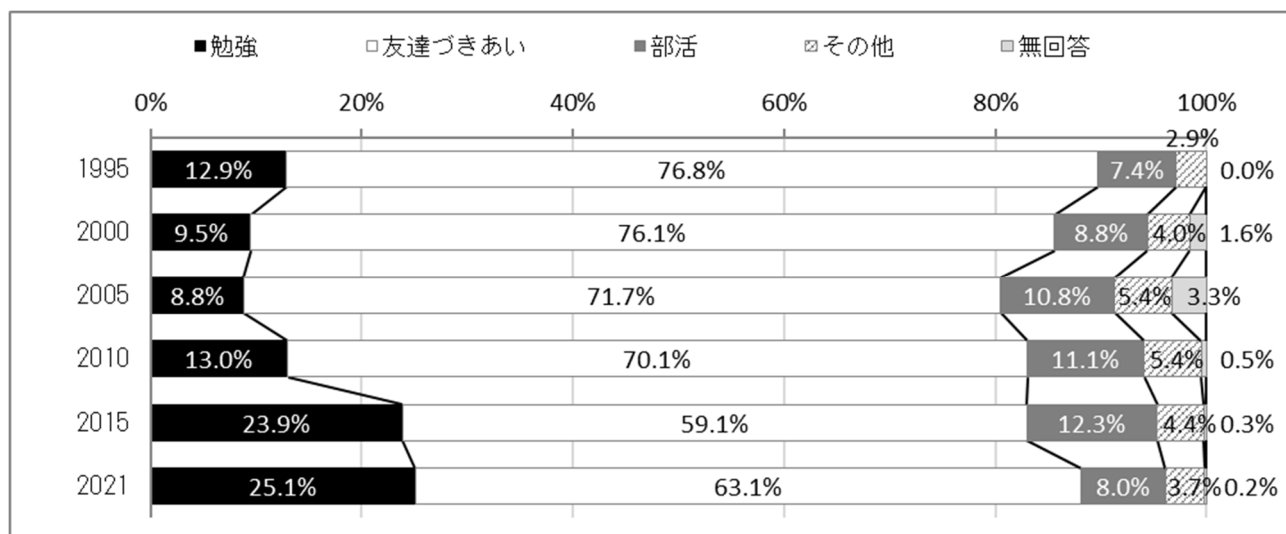
- ① 勉強に関する悩み事の相談相手として、「7. 友達」、「4. 塾の先生・家庭教師」、「2. 母」の上位3項目は、1995年から変わらないが、1995年から増加してきた「4. 塾の先生・家庭教師」が前回と比べ2.7ポイント減少(49.7%→47.0%)し、「1. 父 (29.4%)」、「2. 母 (52.1%)」が過去最高になった。
- ② 「5. 保健室の先生」はわずかだが減少傾向が続いており「10. スクールカウンセラー」は少ないままである。

考察：

「友達」の割合が1995年より一番多く、今回も6割を示し、前回と比べ「父」、「母」、「兄弟姉妹」と家族を選んだ生徒が増えた。その一方、1995年の調査開始から増加し続けてきた「塾の先生・家庭教師」ははじめて減少した。コロナ禍で、リモートワークなど保護者が家庭にいたることが多く話す機会がもてたこと、学習塾では、対面で会う機会が減ったために直接相談できる機会が減ったことなどが要因として考えられる。

5 特徴的な結果③ 9. 学校の中で一番大切に思うものより 時系列

(2) 1995年からの時系列比較及び考察



比較結果：

- ① 「学校の中で一番大切に思うもの」として、「友達づきあい」、「勉強」、「部活」の順は、この調査を開始した1995年より変わらない。
- ② 「友達づきあい」は1995年には4分の3(76.8%)だったが、その後、わずかながら減少傾向を示し、今回63.1%と4ポイント(59.1%→63.1%)増加した。
- ③ 「勉強」は、1995年(12.9%)から2005年(8.8%)まで減少傾向にあったが、2010年(13.0%)より増加傾向に転じ、前回(23.9%)、さらに今回と増加した。
- ④ 「部活」は1995年の7.4%から、増加傾向がみられたが、今回、4.3ポイント(12.3%→8.0%)減少した。

考察：

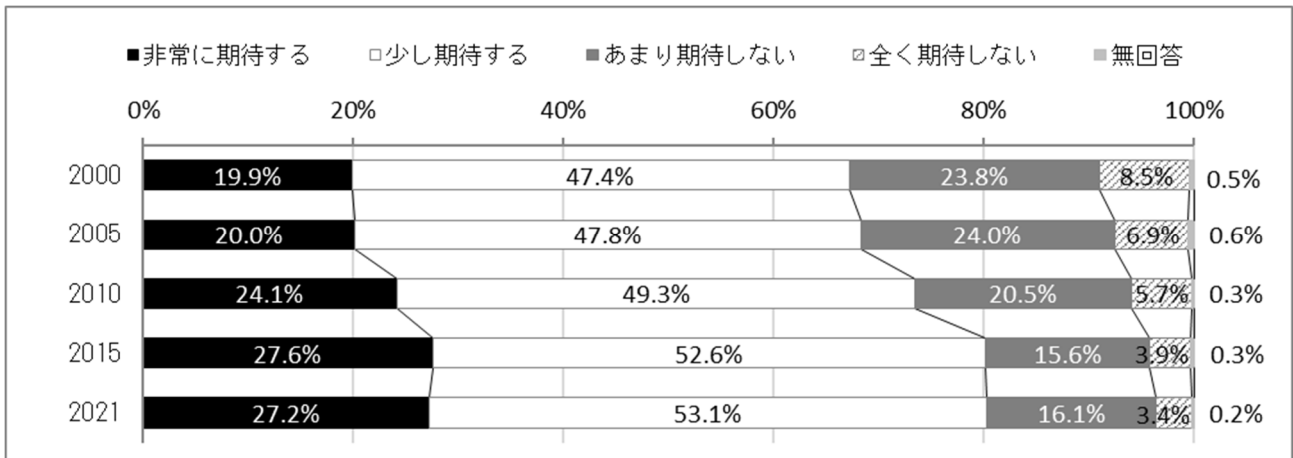
「学校になぜ通うのか。学校は勉強するところだ」は一番、わかりやすい言い方かもしれない。しかし、生徒が一番大切に思っていることは「友達づきあい」であり、この傾向は1995年から変わっていない。前回10ポイント減少した「友達づきあい」は4ポイント回復し、「勉強」が1.2ポイント微増、「部活」が4.3ポイント減少した。2010年と2015年を比べると、「勉強」が増えた分、「友達づきあい」が減り、今回は「部活動」が減った分、「友達づきあい」が増えたようにもみえる。

コロナ禍で「部活」がさまざまな制約を受け、機会が減ったこと、また登校しても、自由に友達と話すことも難しい中で、「友達づきあい」について意識も変わってきているのかもしれない。

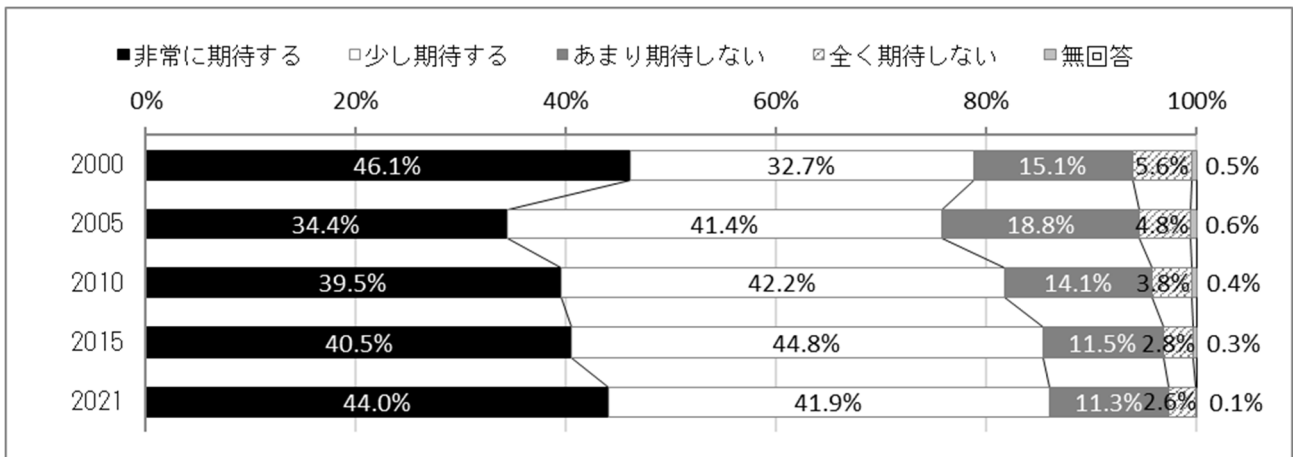
5 特徴的な結果④ 11. 期待する授業から時系列

(3) 2000年からの時系列比較と考察

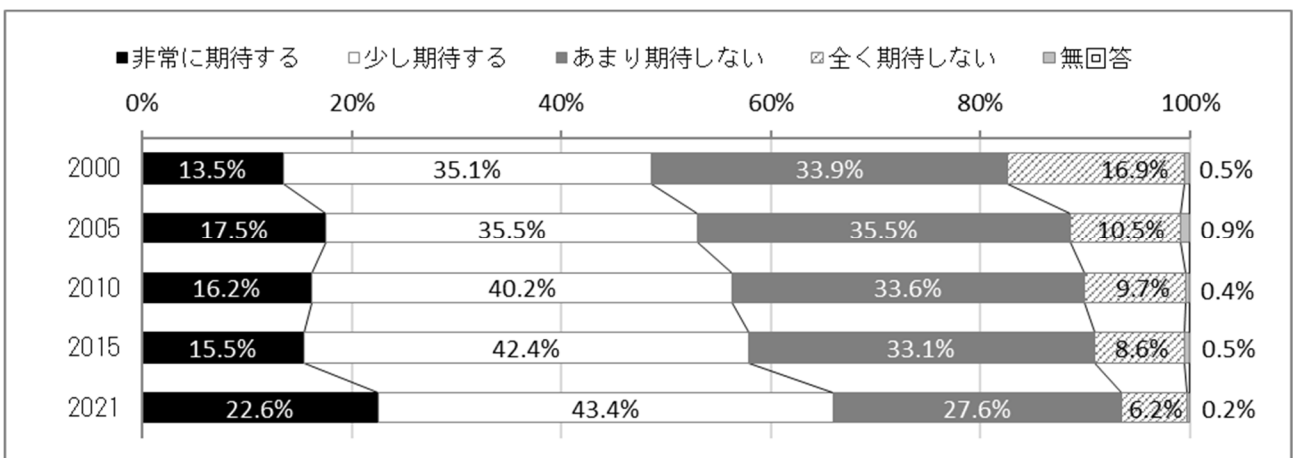
① 11A. けじめがあって、集中できる授業



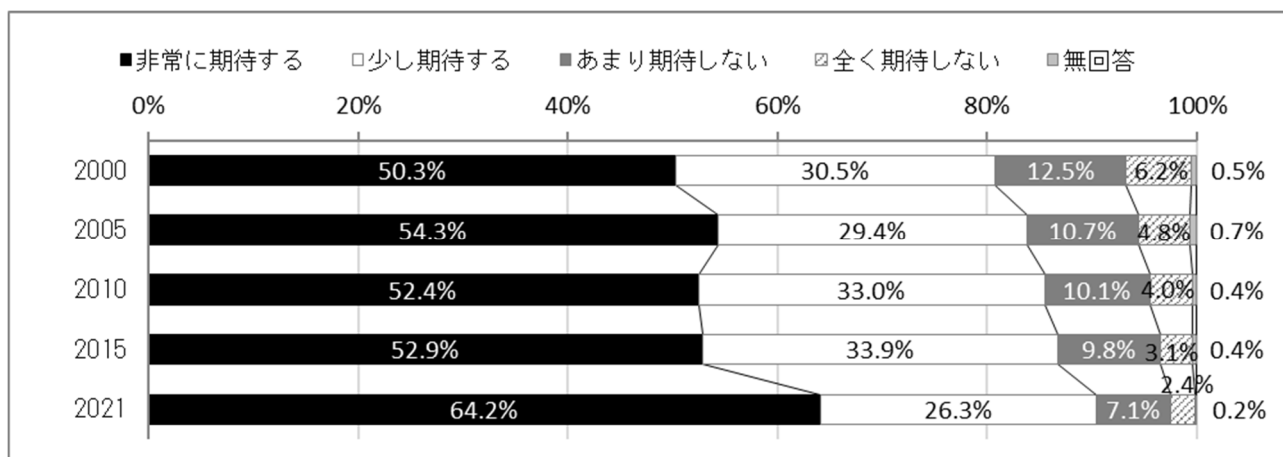
② 11B. 教科書の内容をきちんと教えてくれる授業



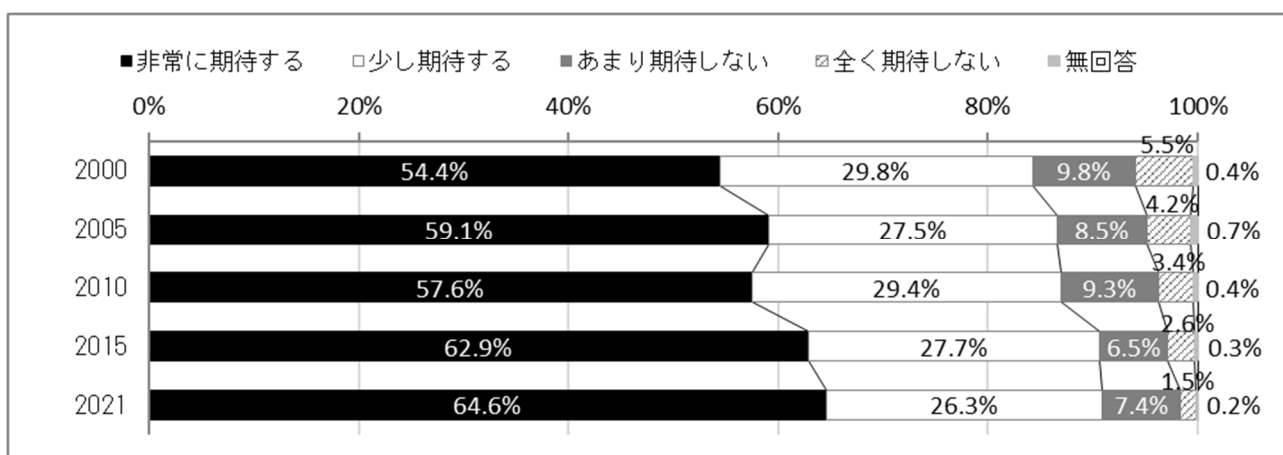
③ 11C. 自分たちで課題を見つけ、考えたり調べたりする授業



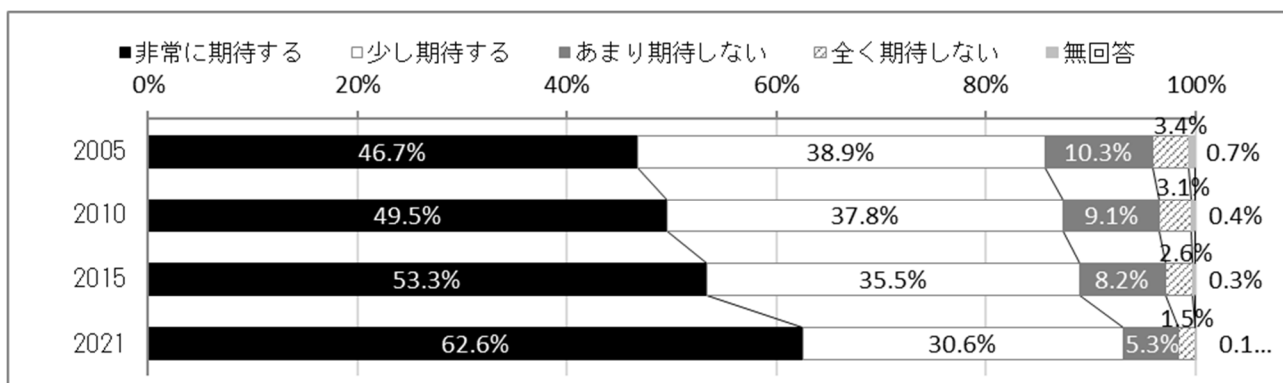
④ 11D. 自分の興味や関心のあることを学べる授業



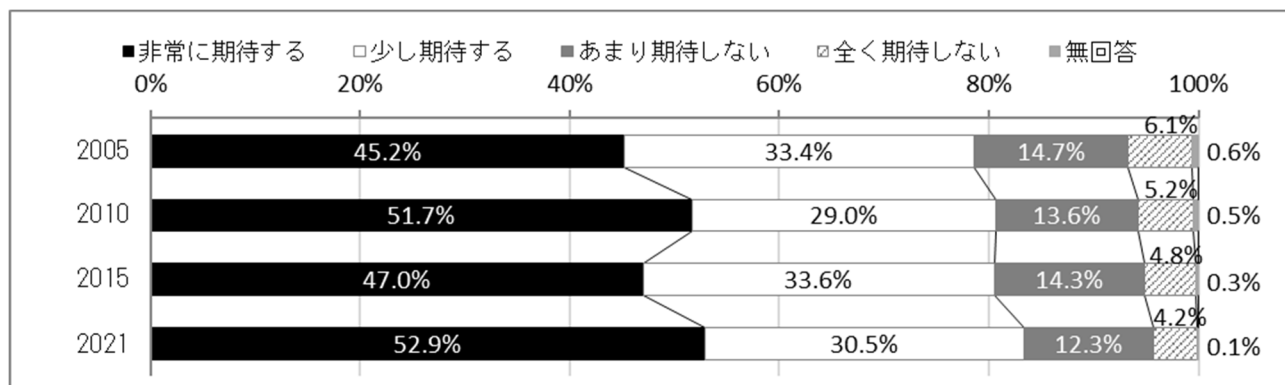
⑤ 11F. 楽しくリラックスした雰囲気での授業



⑥ 11G. 将来役立つ知識や技術を身につけられる授業 (2005年より)



⑦ 11H. 学校の外で見学・体験できる授業 (2005年より)



比較結果：

① 今回から選択肢に加えた「E. グループで考えたり話し合ったりする授業」をのぞいた7つの授業について、調査をはじめた2000年からの変化の様子を比較した。

「A. けじめがあって、集中できる授業」と「B. 教科書の内容をきちんと教えてくれる授業」「F. 楽しくリラックスした雰囲気の授業」に、「期待する(非常に期待する+少し期待する)と答えた生徒の割合は、前回とほぼ同じだったが、それ以外では、増加した。

② 「期待する」と答えた生徒が9割を超えた、「G. 将来役立つ知識や技術を身につけられる授業(93.2%=62.6%+30.6%)」、「F. 楽しくリラックスした雰囲気の授業(90.9%=64.6%+26.3%)」、「D. 自分の興味や関心のあることを学べる授業(90.5%=64.2%+26.3%)」のうち、「F. 楽しくリラックスした雰囲気の授業」が調査の回数を重ねる毎に緩やかに増加しているのに対し、前回と比べて、「非常に期待する」と答えた生徒が、「G. 将来役立つ知識や技術を身につけられる授業」は9.3ポイント(53.3%→62.6%)、「D. 自分の興味や関心のあることを学べる授業」は11.3ポイント(52.9%→64.2%)と大きく増加した。

③ 「C. 自分たちで課題を見つけ、考えたり調べたりする授業」は「期待する」とした生徒が2000年の48.6%(13.5%+35.1%)とほぼ半数から、今回66.0%(22.6%+43.4%)と増加してきたが、特に「期待する」と答えた生徒が前回に比べて8.1ポイント(57.9%→66.0%)、「非

常に期待する」も7.1ポイント(15.5%→22.6%)増加した。また「非常に期待する」と答えた生徒の割合も、前回に比べて、「D. 自分の興味や関心のあることを学べる授業」が11.3ポイント(52.9%→64.2%)、「G. 将来役立つ知識や技術を身につけられる授業」が9.3ポイント(53.3%→62.6%)と大きく伸びた。

④ 2000年からの「非常に期待する」と答えた生徒の割合の変化の様子をみると、2000年、2005年、2010年と、数値の「増減の向き」が変わるものがある。

一度減り、また増えたものは、

「B. 教科書の内容をきちんと教えてくれる授業」(46.1%→34.4%→39.5%)である。

一度増え、また減ったものは、以下の3つである。

「C. 自分たちで課題を見つけ、考えたり調べたりする授業」(13.5%→17.5%→16.2%→(2015年)15.5%)

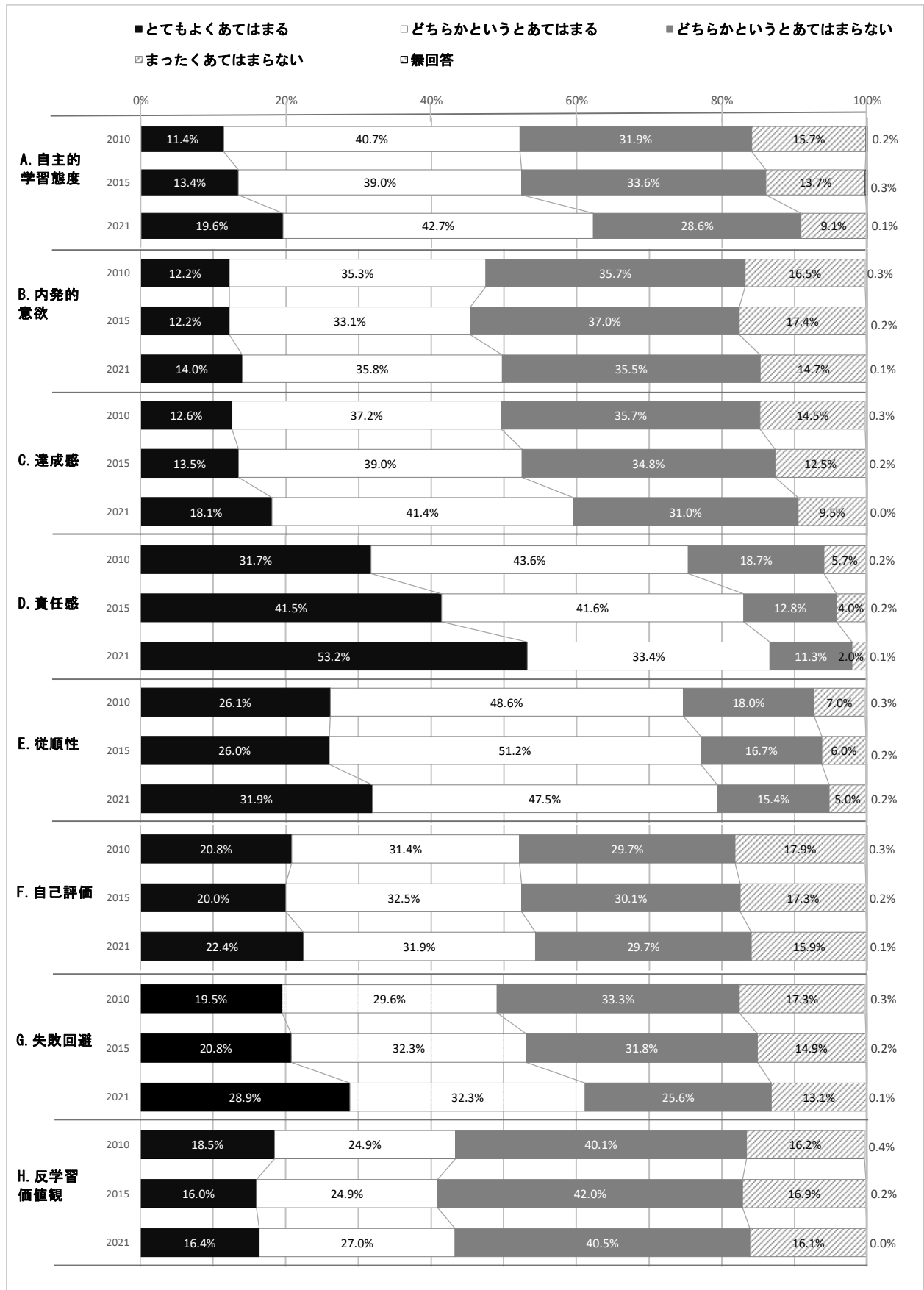
「D. 自分の興味や関心のあることを学べる授業」(50.3%→54.3%→52.4%)

「F. 楽しくリラックスした雰囲気の授業」(54.4%→59.1%→57.6%)

⑤ 「H. 学校の外で見学・体験できる授業」は、「期待する」と答えた生徒の割合はわずかに増加しているが、「非常に期待する」は、50%前後で揺れている。

5 特徴的な結果⑤ 12. 学習の意欲より 時系列

(3) 2010年からの時系列比較と考察



比較結果：

- ① 「学習意欲」の8つの側面を示す項目について、調査を開始した2010年からの変化をみるとA～Fの促進傾向を示す項目では、「あてはまる」と答えた生徒の割合が2005年よりあまり変化が見られないのは、「B. 勉強して新しいことを知るのが楽しみだ(内発的意欲)」と「F. テストが終わったすぐあとに、答えが合っていたかどうかを、自分で調べてみる(自己評価)」が5割を超え、「H. したくない勉強は、無理にしなくてもよいと思う(反学習価値観)」は4割を少し超える。それ以外の項目は増加している。
- ② 特に、今回、前回と比べて、「とてもよくあてはまる」と答えた生徒の割合が増加したのは、「D. しめきりまでに、課題をすませる(責任感)」が11.7ポイント増(41.5%→53.2%)、「G. 間違えるのがいやなので、あまり手を挙げたことがない(失敗回避)」が8.1ポイント増(20.8%→28.9%)、「A. 家の人に「勉強しなさい」と言われなくても、勉強する(自主的学習態度)」が6.2ポイント増(13.4%→19.6%)、「C. むずかしい問題でも、いろいろなやり方を考えて、がんばる(達成感)」が4.6ポイント増(13.5%→18.1%)、であった。
- ③ 「A. 家の人にいわれなくても勉強する」と答えた生徒は、2005年と2010年では、ほぼ同じ傾向だったが、今回「とてもよくあてはまる(11.4%→13.4%→19.6%)」と「どちらかというにあてはまる(40.7%→39.0%→42.7%)」で、割合が増えた。

考察：

学習意欲の促進傾向を示す項目で、「まったくあてはまらない」が減少し、全体としては、「学習意欲」が高まってきているといえる。「宿題のしめきりを守り、先生のアドバイスに従いながら、自ら勉強に取り組む生徒」が増えている。一方で失敗を回避したいという気持ちも強くなってきており、新しいことを知ることにワクワクするような内発的意欲の伸びは大きくない。失敗することを回避するのでなく、失敗は成長のきっかけになるという考え方や、新しいことを知ることは楽しいといった内発的意欲を伸ばすよう教材や導入など授業の工夫や、学習を励ます評価の充実などに取り組む必要があるのではないだろうか。

前回と今回の比較をすると、「しめきりまでに、課題をすませる」、「家の人に言われなくても勉強する」で、「とてもよくあてはまる」が大きく増加した。その理由として、コロナ禍で、家庭学習の機会が増え、自身で時間管理する必要があったことも考えられる。しかし、家庭での過ごし方は、それぞれの家庭環境も異なっていることから、生徒一人ひとりの事情も含まれていることも心に留めておきたい。

p. 51 より 左項目の説明

学習意欲の促進傾向

- | | |
|------------|--------------------------------------|
| A. 自主的学習態度 | 家の人に、「勉強しなさい」と、言われなくても、勉強をする |
| B. 内発的意欲 | 勉強して新しいことを知るのが楽しみだ |
| C. 達成感 | むずかしい問題でも、いろいろなやり方を考えて、がんばる |
| D. 責任感 | しめきりまでに、課題をすませる |
| E. 従順性 | 先生から、勉強のしかたのアドバイスを受けると、やってみようと思う |
| F. 自己評価 | テストが終わったすぐあとに、答えが合っていたかどうかを、自分で調べてみる |

学習意欲の抑制傾向

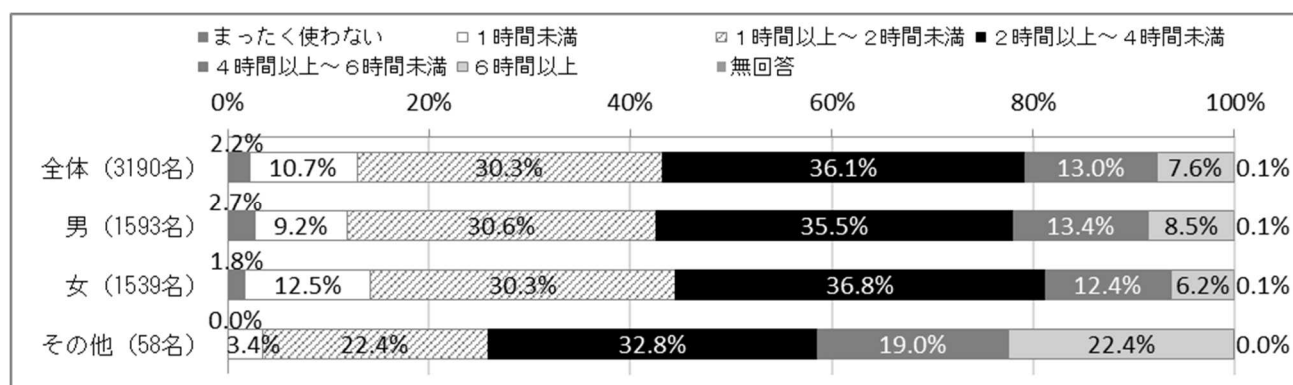
- | | |
|-----------|---------------------------|
| G. 失敗回避 | 間違えるのがいやなので、あまり手を挙げたことがない |
| H. 反学習価値観 | したくない勉強は、無理にしなくてもよいと思う |

1-1. 「 SNS の利用時間 」 と 「 用途 」

(1) 2021 年の調査結果及び考察

項目 13 : スマートフォンや携帯電話、パソコン、タブレットなどの利用について質問します。

13A. 平日には、一日どのくらい使っていますか？ どれか一つに○をつけてください。



調査結果：

① 「平日、一日にスマートフォンや携帯電話、パソコン、タブレットを利用している時間」は、

- 1位「2時間以上～4時間未満」 36.1%
- 2位「1時間以上～2時間未満」 30.3%
- 3位「4時間以上～6時間未満」 13.0%
- 4位「1時間未満」 10.7%
- 5位「6時間以上」 7.6%
- 6位「まったく使わない」 2.2% の順である。

② 平日「まったく使わない」と答えた生徒は、わずか2.2%であり、ほとんどの生徒が使用している。そのうち、1日に「2時間以上」使っている生徒は、56.7% (36.1% + 13.0% + 7.6%) である。

③ 男女差は、「1時間未満」は女子が3.3ポイント(9.2% < 12.5%)多く、「6時間以上」がわずかに男子が多い(8.5% > 6.2%) が、他の時間はほぼ差がない。

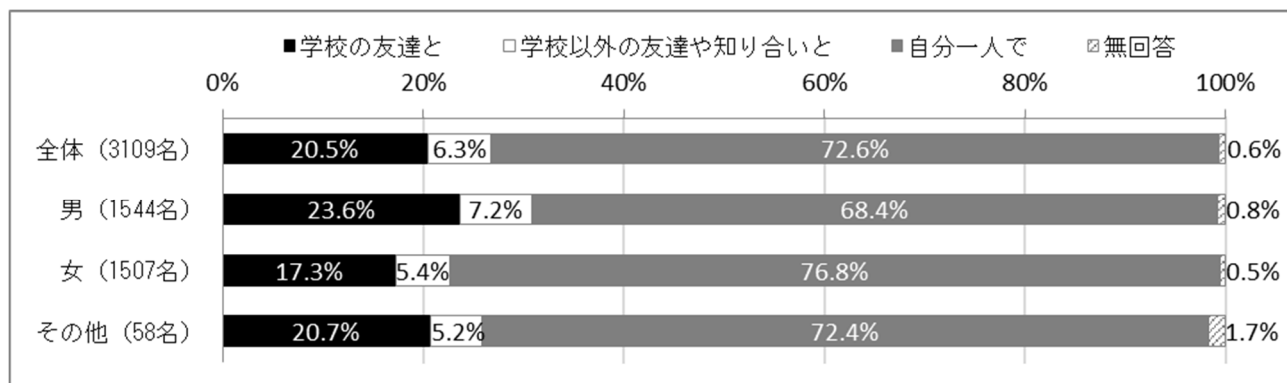
考察：

「まったく使わない」生徒は、わずか2.2% (70名 / 3190名) で、ほぼ全員に近い生徒が、「平日、スマートフォンや携帯電話、パソコン、タブレットを利用している」といえる。とくに、「1時間未満」はほぼ1割で、「2時間以上」使っている生徒は6割にせまる。「6時間以上」がわずかに男子が多いが、それほど男女差は見られない。

平日、学校以外の時間の多くを「スマートフォンや携帯電話等」に使っていることがわかる。「6時間以上」が7.6%というが、学校から帰宅したあとの時間を考えると、睡眠時間を削って使用したり、あるいは、食事や入浴しながら使用したりしていることなどが予想される。

13A. ※平日、使っている生徒について（Aの質問で、「2. 1時間未満」～「6. 6時間以上」に○をつけたみなさんへ）

① 誰と一番多く使っていますか？ どれか一つに○をつけてください。



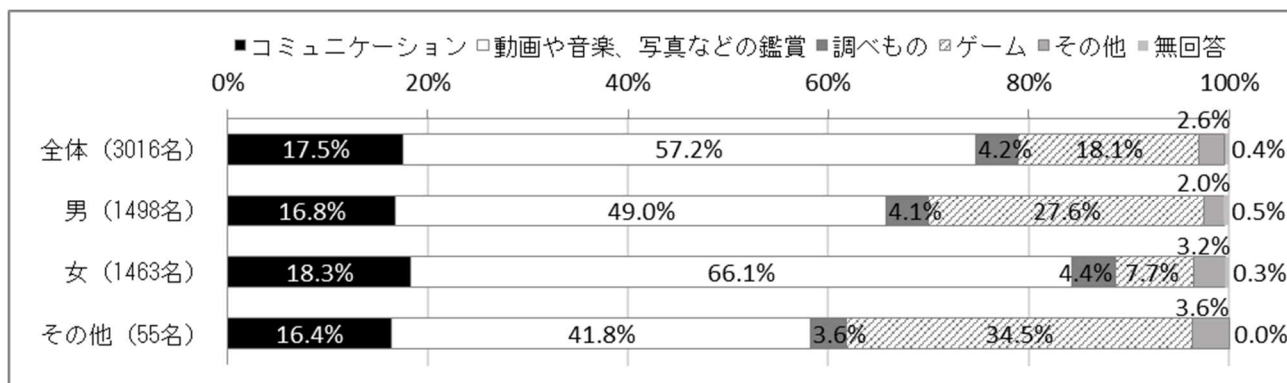
調査結果：

- ① 平日の、使用している相手についての割合は、「自分一人で」が72.6%、「学校の友達と」が20.5%、「学校以外の友達や知り合いと」が6.3%と答えている。
- ② 男子の方が「学校の友達と」が6.3ポイント(23.6% > 17.3%)と多く、その分「自分一人で」が少ない。

考察：

平日利用している相手は、「自分一人で」が7割と圧倒的に多く、「学校の友達と」の3.5倍、女子だけを比較すると4.4倍になる。スマートフォンや携帯など、コミュニケーションの機器と考えがちだが、「自分一人で」利用している生徒が多いことがわかる。

② どんなことに一番多く使っていますか？ どれか一つに○をつけてください。



調査結果：

- ① 平日の用途は、「動画や音楽、写真などの鑑賞」がほぼ6割(57.2%)で、次いで「ゲーム(18.1%)」、「コミュニケーション(17.5%)」「調べもの(4.2%)」の順である。
- ② 男女差について、「コミュニケーション(16.8%≒18.3%)」「調べもの(4.1%≒4.4%)」は大きな差はないが、「動画や音楽、写真などの鑑賞」は、女子が17.1ポイント(49.0% < 66.1%)多く、「ゲーム」は男子が19.9ポイント(27.6% > 7.7%)多い。

考察：

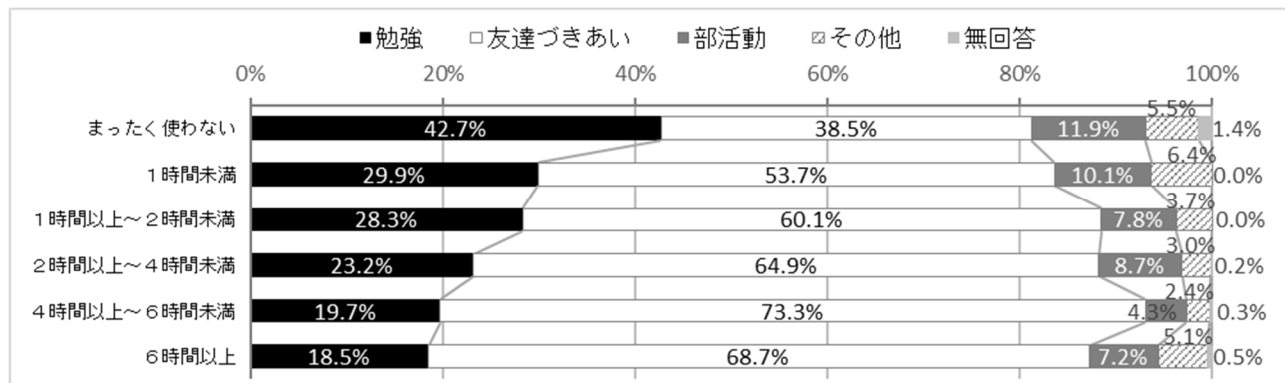
平日の用途は、「動画や音楽、写真などの鑑賞」がほぼ6割で、次いで「ゲーム」が2割、「コミュニケーション」は2割弱で、「調べもの」は生徒にとって、身近な用途になっていない。「ゲーム」は、男子では、3割弱をしめ、男女での「ゲーム」の割合を比較すると、女子の3.6倍にあたる。

前の設問「誰と」と合わせて考えると、自分一人で、「動画や音楽、写真などの鑑賞」や「ゲーム」をする生徒が多いことが想像される。しかし、近年、様々なオンラインゲームなどが登場しており、「ゲーム」が「自分ひとり」かどうかは、この調査では明らかでない。

5 特徴的な結果⑥ SNSの利用と学校で一番大切に思うもの

1-2. SNS利用とのクロス集計

(1) 「13A. SNS 平日利用時間」と「9. 一番大切に思うもの」のクロス集計



調査結果：

- ① 「SNS 平日利用時間」と「9. 一番大切に思うもの」のクロス集計である。「まったく使わない」と答えた生徒の「学校の中で、一番大切に思うもの」は、「勉強」が4割強(42.7%)、「友達づきあい」が4割弱(38.5%)、「部活動」1割強(11.9%)、「その他」が5.5%の順である。
- ② 利用時間が増えるにつれ、「勉強」は減少し「6時間以上」では2割弱(18.5%)、「まったく使わない」と比べると24.2ポイント減少(42.7%>18.5%)する。
- ③ 「友達づきあい」は利用時間が長くなるほど増加し「4時間～6時間未満」がピークで7割(73.3%)を示し、「まったく使わない」と比べ、34.8ポイント(38.5% < 73.3%)とほぼ2倍になっている。
- ④ 「部活動」は利用時間が長くなるほど減る傾向があり、一番減少する「4時間～6時間未満」では、4.3%である。
- ⑤ 利用時間が「4時間～6時間未満」と「6時間以上」を比べると、それまで増えてきた「友だちづきあい」が4.6ポイント(73.3%→68.7%)減少し、また減少してきた「部活動」が2.9ポイント(4.3%→7.2%)増加し、それまでの傾向と少し異なる。

考察：

平日の利用時間が長くなるほど、「勉強」を選んだ生徒は減少する。このことは、帰宅後の時間を考えれば、「スマートフォン等」の利用時間が長くなれば、勉強に費やす時間も限られることは自明である。「勉強を大切だと考える生徒は、勉強時間も長くなる」と仮定すれば、当たり前かもしれない。利用時間が長くなるほど、「友達づきあい」の割合は増加し、「4時間以上6時間未満」では

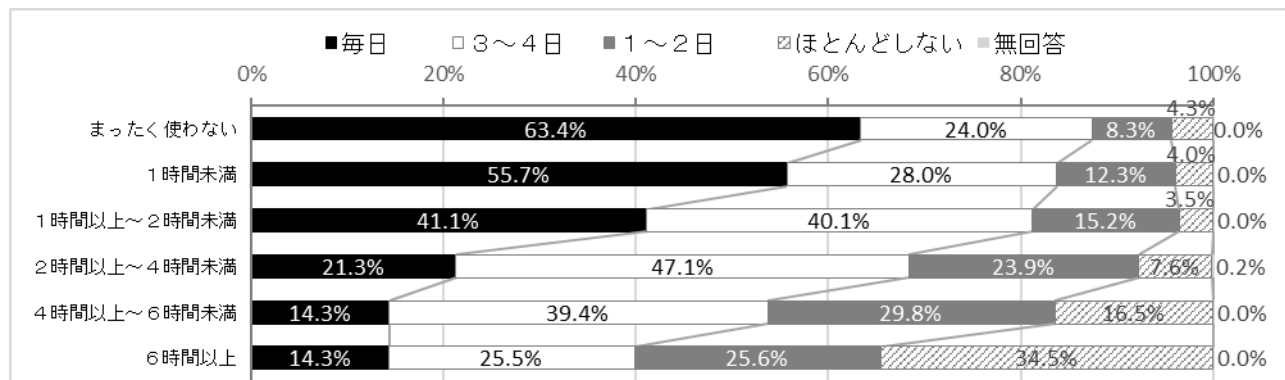
73.3%と最大値を示す。利用時間が長くなるほど「友達づきあい」を多く選ぶ傾向がみられた。

前回の調査では、「学校の中で一番大切なもの」の「友達づきあい」が減ってきた要因として、「スマートフォン等」を使うことで、対面でなくても「学校の外で友達とつながれる」からではないかと考えていた。しかし、結果は違っていた。数字を素直にみれば、「利用時間が長いほど『友達』を大切と思う生徒が多い」ということになるのだが、「勉強がきらい」「部活にはいっていない」生徒が、結果的に「友達」と答えているという可能性もある。また「勉強」しながら、そばにスマートフォンを置き、ときどき入ってくるメールに返信したり、「動画などを鑑賞している」といっても、一人で画面を見つめている生徒もいれば、話題についていくために、つけておいて、ときどきチェックする、そんなつき合い程度で見ている生徒もいるかもしれない。「何かしながら」ということになれば、利用時間は当然長くなるだろう。そして、ここで使っている「ことば」についても、むずかしい面を含んでいる。たとえば「コミュニケーション」をどう解釈するか。「相手と話をする」ということか。対面でないものも含んでいるのか。ここでいう「相手」は誰なのか、顔見知りのある特定の人物なのか、そこに参加している不特定の人物を想定しているのか、また、「ゲーム」の中に「コミュニケーション型」はどの程度含まれているのか、そこでおこっていることを「コミュニケーション」といっていいのかなど、次々と疑問がわいてくる。「おとな」がイメージした「ことば」の意味と「子どもたち」では違う可能性も含んでいるかもしれない。

13. SNS利用時間×古典的な学習観に基づく項目

(2) 「13A. SNS 平日の利用時間」と「古典的な学習観に基づく項目(1. 勉強時間・2. 理解・3. 自信・4. 意欲・5. 集中)」のクロス集計

① 1. 勉強時間



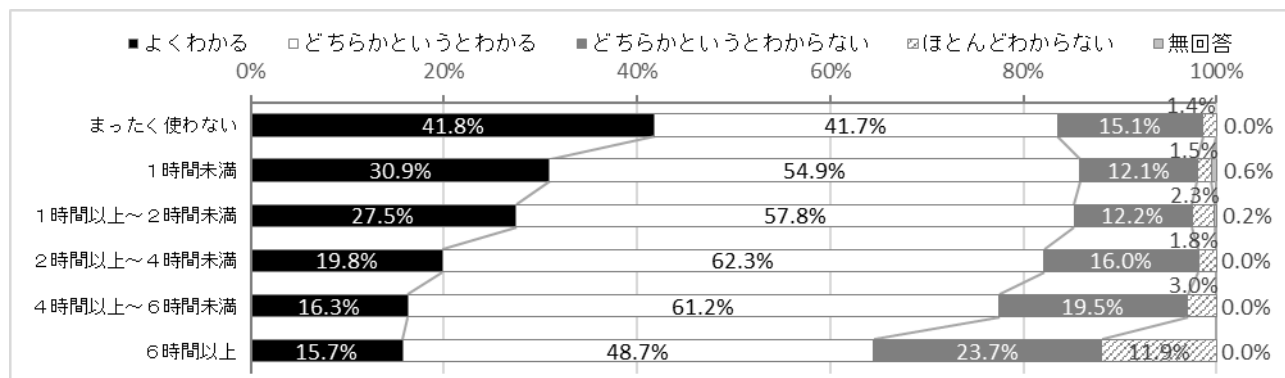
調査結果：

- ① SNS 平日利用時間(縦軸)と「平日の帰宅後勉強する日数(横軸)」のクロス集計である。平日 SNS を「まったく使わない」生徒は、「毎日勉強する」が 6 割強 (63.4%)、「3~4日」が 4 人にひとり (24.0%)、「1~2日 (8.3%)」、「ほとんどしない(4.3%)」の順である。
- ② 利用時間が増えるにつれ、勉強する日数は、ほぼすべての選択肢(横軸)で減少する。特に「6時間以上」では「ほとんどしない」が一番多く、「まったく使わない」の 8 倍 (4.3%→34.5%) である。
- ③ 「ほとんど(勉強)しない」は、「6時間以上」では 34.5%で、それまでと比べて、急に増加する。

考察：

平日「まったく使わない」生徒の 6 割強が「毎日勉強する」習慣を持っているのに対し、平日の利用時間が長くなるほど、「毎日」は急激に減少し、「平日の勉強日数」も減っていく。「6時間以上」利用する生徒の 14.3%が「毎日勉強する習慣」を持っているものの、3分の1(34.5%)が「ほとんどしない」としている。「毎日」がどれくらいの時間なのかは不明だが、生徒の帰宅後の時間を考え、過ごし方を想像すれば、「利用時間が長いほど、勉強の日数が減少すること」は当然だろう。家庭での利用時間のルールがあるなど時間が制限されていることも考えられるが、この調査からは明らかでない。

② 2. 勉強の理解



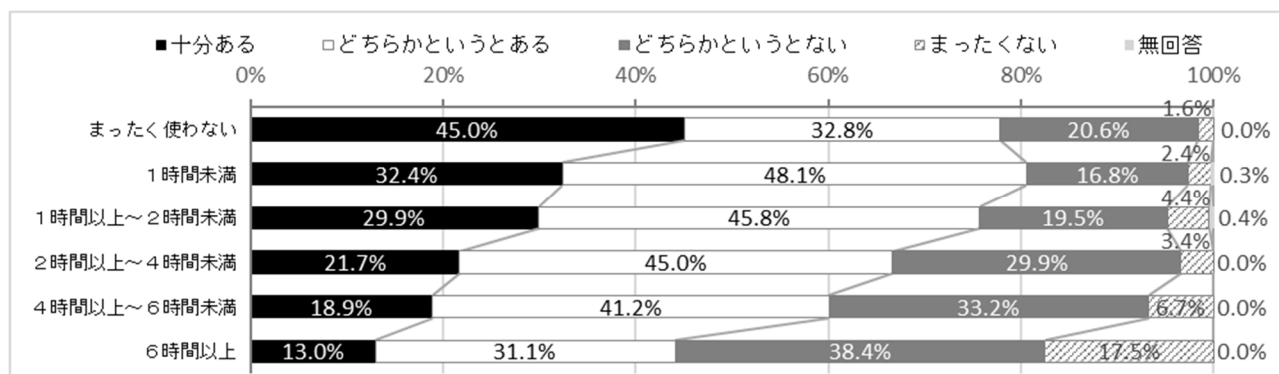
調査結果：

- ① SNS 平日利用時間と「勉強の理解」のクロス集計である。利用時間が増えるにつれ、「わかる(よくわかる+どちらかというわかる)」は減少し、特に「6時間以上」では、「わからない(どちらかというわからない(23.7%)+「ほとんどわからない(11.9%))」が、3人にひとりになる。

考察：

平日「まったく使わない」とした生徒の 4 割強が「よくわかる」としている一方、「6時間以上」では「よくわかる」が 15.7%で、「わからない」と答えた生徒は大きく増加し、3人にひとりになる。このことは、SNS の利用時間が「勉強の理解」に大きな影響をもたらしている可能性を示唆しているのかもしれない。

③ 3. 勉強について行く自信



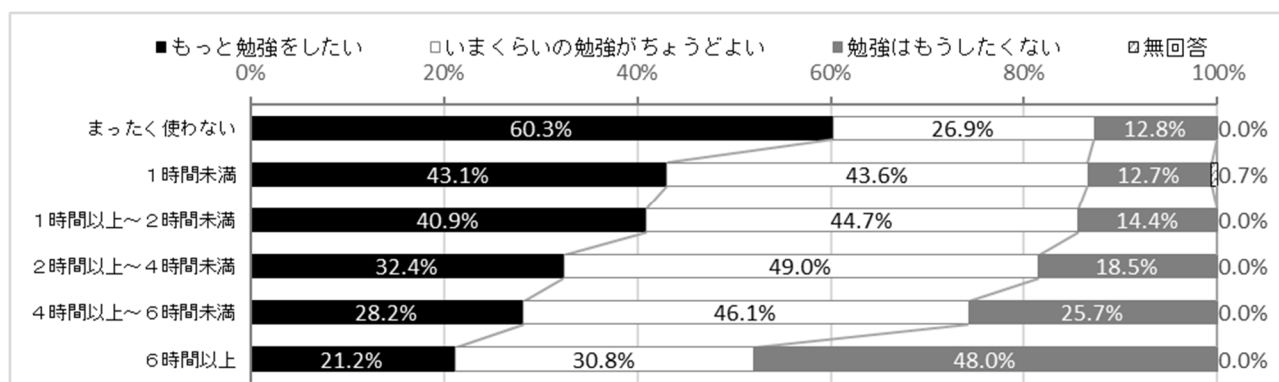
調査結果：

- ① SNS 平日利用時間と「勉強について行く自信」のクロス集計では、平日 SNS を「まったく使わない」生徒のうち、「(自信が) 十分ある」が 45.0% でほぼ半数にせまる。利用時間が増えると、「(自信が) 十分ある」は減少し、「6 時間以上」では 13.0% である。
- ② 「1 時間以上～2 時間未満」と「2 時間以上～4 時間未満」の「(自信が) ない (どちらかというところない+まったくない)」を比べると、9.4 ポイント増加 (19.5% + 4.4% → 29.9% + 3.4%) する。

考察：

「1 時間未満」で「自信がある(十分ある+どちらかというところ)」と答えた生徒の割合はほぼ 8 割(32.4% + 48.1%)を示すが、特に「6 時間以上」では「十分ある」が 13.0% だが、「ない(どちらかというところない+まったくない)」が 55.9%(38.4% + 17.5%) と半分以上を占める。「6 時間以上」利用している生徒が、どのように利用しているのか、この調査からは読み取ることができないが、その要因についてもさぐる必要がある。

④ 4. 勉強の意欲



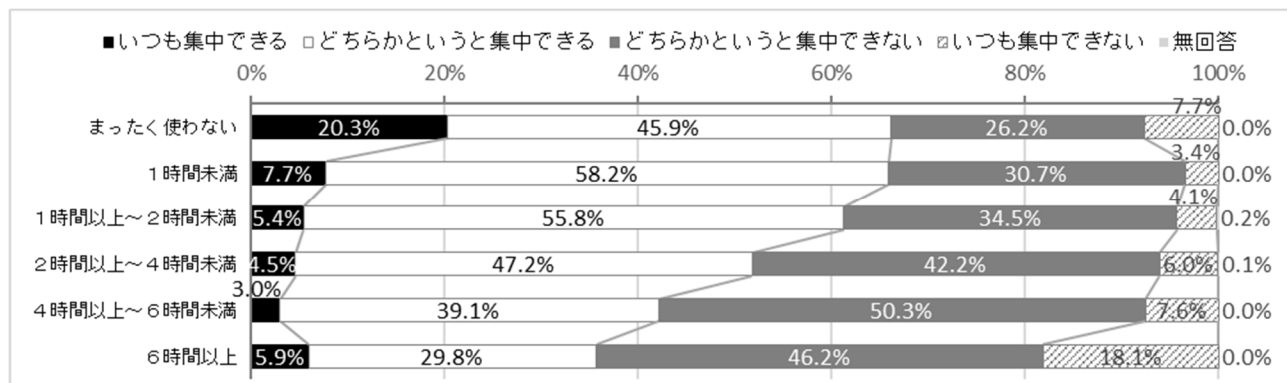
調査結果：

- ① SNS 平日利用時間と「勉強の意欲」のクロス集計である。平日「まったく使わない」生徒は、「もっと勉強したい」が 6 割を超える (60.3%) が、利用時間が長くなるにつれて減少し、「1 時間以上～2 時間未満」を超えると急激に減少 (40.9% → 21.2%) し、「もうしたくない」が増加 (14.4% → 48.0%) する。
- ② 「6 時間以上」ではほぼ半数 (48.0%) の生徒が「勉強はもうしたくない」と答えている。

考察：

平日「まったく使わない」とした生徒のほぼ 6 割が「もっと勉強したい」と答え、「6 時間以上」のほぼ半数が「もうしたくない」と答えている。「スマートフォンなど」を一日 6 時間使っている生徒は、なにかしたいことが別にあるのか、ただ単に勉強に関心がないのか、その要因は、この調査からは明らかではないが、6 時間以上の利用が、勉強への意欲をなくさせていることは確かである。

⑤ 5. 勉強への集中度



調査結果：

- ① SNS 平日利用時間と「5. 勉強への集中度」のクロス集計。「集中できる（いつもできる＋どちらかというとできる）」は「まったく使わない」と「1時間未満」を選んだ生徒の割合はほぼ同じ（「まったく使わない(66.2%≒65.9%)」）だが、「いつも集中できる」は、20.3%→7.7%と大きく減少する。
- ② 「2時間以上～4時間未満」で「集中できる（「いつも集中できる(4.5%)＋どちらかというとできる(47.2%)」）と答えた生徒が51.7%、「集中できない（どちらかというとできる(42.2%)＋できない(6.0%)）」が48.2%とほぼ同数になり、「4時間以上」では、「集中できない」が逆転する。
- ③ 平日「まったく使わない」生徒の2割（20.3%）が「いつも集中できる」としているが、「6時間以上」では、ほぼ2割（18.1%）が「いつも集中できない」としている。

考察：

平日「4時間以上（4時間以上～6時間未満＋6時間以上）」になると、半数以上が「集中できない」と答えている。特に「6時間以上」の約2割が「いつも集中できない」としていることは、何にどう利用しているかは不明だが、長時間の利用で睡眠不足など生活のリズムが崩れ、授業中眠くなるなどの影響があるのではないかと考えられる。

調査結果：

① スマートフォンや携帯など SNS を「平日利用している時間(縦軸)」と「授業の期待度(横軸)」のクロス集計である。

「利用時間」が長いほど、「期待する(非常に期待する+期待する)」と答えた生徒の割合の減る傾向があるのは、

「A. けじめがあって集中できる授業」

「B. 教科書の内容をきちんと教えてくれる授業」

「C. 自分たちで課題を見つけ、考えたり調べたりする授業」である。特に「B. 教科書の内容をきちんと教えてくれる授業」は減少する強い傾向がみられる。

「期待する」と答えた生徒の割合に注目すると、「B. 教科書の内容をきちんと教えてくれる授業」については、「まったく使わない」では、「非常に期待する(56.0%)」と「少し期待する(32.7%)」を合わせると9割近く、「6時間以上」でも74.8%(31.1%+43.7%)と4分の3を占め、高い割合を示す。

また「C. 自分たちで課題を見つけ、考えたり調べたりする授業」については、「まったく使わない」では「非常に期待する」は25.5%とほかの授業に比べると少ないが、「少し期待する(50.3%)」と合わせると75.8%になる。

② 「利用時間」と「期待する(非常に期待する+期待する)」の関係があまり変化しないのは、

「D. 自分の興味や関心のあることを学べる授業」

「G. 将来役立つ知識や技術を身につけられる授業」

「H. 学校の外で見学・体験できる授業」である。

③ 「G. 将来役立つ知識や技術を身につけられる授業」では、「非常に期待する」は6割を超え、「期待する(非常に期待する+少し期待する)」の平均も92.4%と高くなっている。また「D. 自分の興味や関心のあることを学べる授業」でも、「期待する(非常に期待する+少し期待する)」を選んだ生徒が8割(85.6%)を超える。

③ 「E. グループで考えたり話し合ったりする授業」は利用時間によってそれほど変化しないが、他のタイプの授業と比べると、一度増加し、そのあと減少するようにみえる。「非常に期待する」に注目すると、「まったく使わない」が29.7%で、「6時間以上」が33.2%と「まったく使わない」生徒が一番少ない。

④ 「F. 楽しくリラックスした雰囲気の授業」は利用時間が長くなるほど、わずかだが「期待する」が増える。

考察：

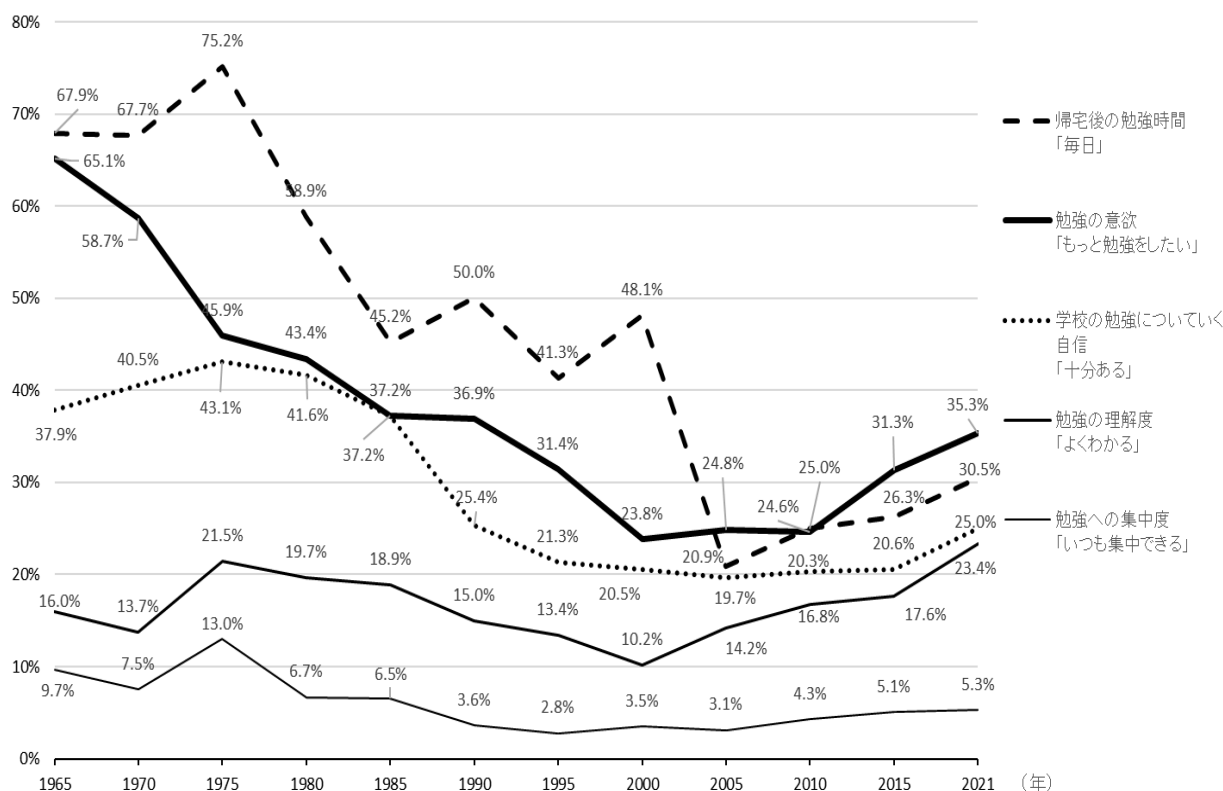
「教科書の内容をきちんと教えてくれる授業」や「けじめがあって集中できる授業」は利用時間が増えると、急激に「生徒の期待」が大きく減少していくが、「自分の興味や関心のあることを学べる授業」や「学校の外で見学・体験できる授業」は、利用時間による変化がない。しかも「将来役立つ知識や技術を身につけられる授業」「自分の興味関心のあることを学べる授業」の「期待する(非常に期待する+少し期待する)」は高い数値を示している。

利用時間が増えても「期待する」が減少しない「自分の興味や関心のあることを学べる授業」、「楽しくリラックスする授業」は、別の見方をすれば、利用時間が増えると「授業に期待する」と答える生徒の割合が減少する中で、この2つの形が「授業へのモチベーションを支えることができる授業の形」であるともいえる。

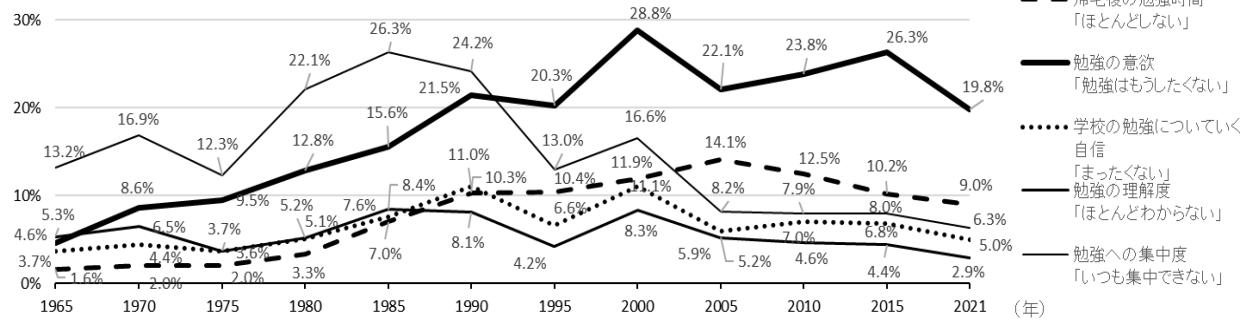
また「グループで考えたり話し合ったりする授業」の「非常に期待する」に注目すると、他の授業の形と違い「まったく使わない」生徒が、29.7%と一番少ない割合を示している。これは、SNSをまったく利用しない生徒の中に、友達と考えたり話し合ったりすることに関心を持たない生徒が含まれていることを示しているのかもしれない。

第5章 調査全体のまとめ より

【図1. 望ましい選択肢】



【図2. 望ましくない選択肢】



2. 帰宅後の勉強時間の増加と二極化

毎日勉強する習慣をもつ生徒は、1965年には67.9%だったが、「学習塾」に通う生徒が増加するにつれて、2005年には20.9%まで減少した。その後、少しずつ増え、今回3割に達し、勉強時間も長くなる傾向がみられた。特に、「毎日勉強する生徒」は、土曜日、日曜日に「2時間以上」勉強する割合が74.9%と56.0%と高く、反対に「(勉強を)まったくしない」と答えた生徒は、土曜日、日曜日にも65.5%と69.0%となっている。このことは、平日、毎日勉強する習慣のある生徒は、土日にも長い時間勉強しているが、平

日勉強をしない生徒は、土日にもしない二極化がおこっていることを示している。

また、学習塾に通う生徒と勉強時間の関係を見ると、「土曜日2時間以上」勉強する生徒の割合では、学習塾に通う生徒は9.2%増えて57.1%に、通信教育をしている生徒は27%増えて47.1%と、前回より大幅に増加し、学習塾や通信教育など勉強に関係する習い事をしている生徒の「勉強時間」が長くなっていることが明らかになった。「学習塾」「通信教育」が勉強時間を長くする要因になっているとも考えられるが、「学習塾」「家庭教師」「通信教育」のいずれも